

# 『ジョン・ダン入門』

## — 背信と野心の詩人 —

ジョン・ケアリ著  
朝倉秀之訳

### 第三章 野 心

ダンの伝記を取り扱う範囲は、これまでばらばらだったと言つてよい。ダンの信仰的な変遷に注目してみると、ざっと一五九五年と特定できる背信と『風刺詩 三』の時期から一六〇九—一一年へと飛んでいる。後半ではダンが反カトリックの宣伝活動をしたり、『ホーリー・ソネツ』の中で霊的危機を記した両方を経験する。この章では一五九〇年代に戻り、実生活のなかに様々の事件を嵌め込む必要がある。実際に、ダンは一六一五年英国国教会の聖職に就き著明な説教者として身を立て始め、一六三一年には死をもって終わりを告げることになる。

その全体を貫き、結び合わせる糸が、働いてこの世で必ず成功したいという止むことのない気持ちである。このことが、ダンの心を捉えて放さなかったから、信仰的義務であると考えられるに到つたのである。説教集の中ではそれほど頻繁に触れる主題はない。「ひとかどの者になる」は「偉大な人間になる」というダンの変わ

らない口癖がある。何もしないでいると、恐ろしくなった。怠け者は植民地へ送つて、強制労働をさせるのがよいとダン<sup>(2)</sup>は提案した。食べたり、眠つたり、その他の瑣末なことに多くの時間を費やすことを考えると悲しくなった。ましてまともに考えれば、十年以上生きるなどは誰もいえないのだから。大人も子供も手に職をつけるべきである。「刀を作る、船を造る、鋤を作る、商売をする」<sup>(4)</sup>。これといった定職を選ばず、忍耐強く求めることをしないなら、役に立たない儂い生きものになつてしまふ。それはまるで手を水をはった鉢から出すように、死んでいくのである。「水をはった鉢は手を洗つたあと、多少は汚れるかもしれないが、そこに存在した如何なる痕跡も残さない」<sup>(5)</sup>からである。

その倫理観はダンの専売特許ではなかったが、相当な思い入れで信奉していた。プロテスタントの間で流行つていたものであり、それが進歩と幸福の中の信仰と修道院的怠惰さに対する憎悪とを調和させたからである。ダン<sup>(3)</sup>は上手に利用した。「腕のいい職人なら退職者や修道士と比べて国家にもっと役立つ人間になる」と主張する。「この世に生まれてきたのは苦しむためではなく、仕事をするためであ

る<sup>(6)</sup>。元来、仕事を目的と見なしているわけでもない。富を蓄積することが適切で正当な目的であった。「生めよ、増やせよ」という神の命令は、たとえ有り余る財産を相続しようとも、努めて財産や土地を大きくしなければならぬということになる。「神は先ず親たちを通して肥沃な土地を多くの人びとにお与えになる。しかし、神の目的は、その土地を増大させることにある<sup>(7)</sup>」。この世の良い結果を喜ばない者は、神の命令に背くことであり、「勤勉に働かない者や良い結果を得るためにあらゆる良い手段を使わない者」が背くことになる。

金銭が唯一の目的ではなかった。ダンが怠惰という病気について論争する背後には、決まった仕事を通してのみ人間は支離滅裂になった自己を捨て去り、世界の一部になることができるという信念がある。はつきりしているのは、これを切実に感じていたことであった。溶け込みたかったのである。職業の選択について話すとき、ダンが使う言葉は、他人を蹴落としてまでの自己昇進ではなく、反対に、孤立した自己を飲み込むと大きな全体へと融和することを暗示している。仕事が必要ならば「神の偉大な鎖に繋がらない」し、「この世という身体に組み込まれ<sup>(8)</sup>」ていないなら、いかに偉大な人びとであろうと、腫物か、瘤か、「木っ端」にすぎないのである。微かに違った装いになっていられると思われが、この欲求はダンの恋愛詩の中でお馴染みである。恋人は自己を覆い隠してしまう結合の中で自分が孤独になることを避けたいと願う。

愛が、こうして、二つの魂に、お互いに

新たな生氣を加えさせるならば、

そこから流れ出るあの優れた魂は、

孤独の寂しさを癒してくれる<sup>(9)</sup>。

ダンがローマ・カトリックを捨てたことは、幾分かはその動機付けになったかもしれない、というのがこの論旨である。カトリック教徒として英国民になることができなかつた。溶け込みたいという衝動は、満足させられなかつたのである。逆説的に言えば、ローマ・カトリックの社会からも切り捨てられたからである。その板挟みは、はね除けようがなかつた。一人ぼっちであるという感覚とそれを克服しようとする欲求とが相まって、生涯ダンの思想の中で争つたり、治めたりする特徴となる。その様々に不和を生む影響は恋愛詩の中に証拠がある。お互いに魂が結合するのを称える『別れの歌、悲嘆を禁じて』や、どんな魂も結合することなどできないとする『恋の錬金術』である。同様に、宗教詩の中でも、神から離れることとそれを押し止める闘いが、主要な主題であると見てきた。

「孤独の寂しさ」というダンの個人的孤立感は、歴史的な状況だけでなく個性から生じていた。一人であるという強烈な感覚は、ダンが夢見た全体的な結合を促した、と同時に禁じもした。キリスト教の聖職者になつてからは、もちろん社会の美德を勧め、努めて信仰深い魂をキリストの身体なる教会の一員になるようにするのは当然のことであつた。一六三三年の『信心録』から最もよく引用される記述の一つで、ダンが勧めをしているのを読むことができる。「どんな人が死んでも、わたしを縮小させる。なぜなら、わたしが人類に含まれているからだ。それゆえに、誰のために弔いの鐘が鳴っているのかを知るために決して召使を聞きにやるな。あなたのために鳴っているのだから<sup>(10)</sup>」しかし、ここでさえ、抜け目なく注目させているように、実際のところ弔いの鐘が鳴っている人については何の考えも無

いし、全体的な黙想の中で、その人の生と死を同情的に想像する素振りさえ無いのである。反対に、その調子と勧めは、全体として自己中心的なのである。「どんな人が死んでも、わたしを縮小させる。、、誰のために弔いの鐘が鳴っているのかを知るために決して召使を聞きにやるな」<sup>(12)</sup>

ダンの野心的性格は、そこに自家撞着の種を抱え込んでいる。自己肯定と自己否定である。この世で自分の道を切り開きたいという願望とその中に同化したという願望との二つの要素によって、ダンは修道士よりも行動する人間を選んだのである。しかしながら、知識人として必然的に思想と行動とのはざままで引き裂かれるのを感じたのである。友人グッドイヤー宛に書いている。「最悪の肉欲が」リンカーン法学院での実際の法律の勉強を台無しにしまったが、「それがまた、古典文学やラテン・ギリシャ語を勉強したいという水腫病患者みたいにめちゃくちゃな欲求になっている」。自分が研究熱心であると告白しているが、それは病気であるとも見ている。知的業績は財産がたくさんあるところでは装飾としては許されるだろうが、自分にとって必要なのは「仕事」である、と。<sup>(13)</sup>

初期の詩である『諷刺詩』の中で、行動に対する主張は、耳障りなほどに明白である。第一の諷刺詩はダンが書齋にいるところで始まり、自分をロンドンの通りに追い出したいとおもっている厄介な闖入者を非難する。

失せろ、馬鹿で、移り気で、気紛れ屋、

放つといってくれ、この立ちはだかる木製のオケに

これらの本を詰め込んで、ぼくをカンゴクに

横たわらせてくれ、死ねば、ここをカンゴクにして。<sup>(14)</sup>

演説はそれ自体自己矛盾である。ダンは自分の書齋に残っていたというのに、それをカンゴクだとかカンゴクだとかいう。驚くにはあたらないが、ダンと闖入者は詩が終わるずっと前に、群衆の間に出てくる。正に諷刺詩の本質は、ダンの行動的な気質を反映している。諷刺詩は何について書いてあるのかと問われれば、最高の答えがある。攪乱すること。その社会的洞察力に対してではなく、むしろその耐えがたい肉体の動きに注目すべきなのである。それは、統語法が無視され、主題が押しやられるやり方と同様に、強烈で、棍棒で叩くようなリズムの中で明確である。諷刺詩はエネルギーの宝庫である。『諷刺詩 一』の中で、厄介な同僚の行動を描写する動詞は、詩を活気づかせる。忍び歩き、スキップし、にっと笑い、舌鼓を打ち、肩を竦め、前屈みになり、飛び、走り、後ろに落ち、追いつき、そして最後には、

ぼくのところから消えていなくなり、

激しく、奴は好色に浸る。

この気違いのように動き回る「気紛れ屋」をダンが、努めて客観化し、糾弾してはいるものの、自分自身の一面なのである。愛や研究や宗教の中で使われる「滑稽な」すなわち、気が変わりやすく、機知に富んだ）気質は、ダンが際限無く、無為に嘆くものであったことを知る。

止むことのない行動を別にする、諷刺詩の主要な働きは憎悪である。観察されている世界は、墮落、見かけ倒し、好色、裏切り、

卑猥であり、宮廷はその最悪のところである。ダンが印象づけるように、誰もがそうではないが、

全ての悪に向かいがちであり、長いことには忘れっぽく

傲慢で、壮健で、同額の負債があつて

自惚れが強く、思慮がなく、不法であるのは、

宮廷に入りびたっている人たちのようである。<sup>(16)</sup>

もしもその宮廷を中心に回る世界がそんなにも忌まわしい場所であるなら、何故ダンがそこでの足場を得ようと神経という神経を擦り減らしてまで続く二十年も過ごしてしまったのかという問いを抱かせるかもしれない。だが、それは微妙な問題となる。ダンの怒りは裏返しの野心から生まれている。憎しみは自分自身に注意を向けた一方法である。

閣下、(それ故に神に感謝するのですが) わたしは全く

この町全てが嫌いなのです。

社会の腫物を引き裂きながら、ダンは他の人たちよりもっと正直で公正であるだけでなく、当意即妙の答えができるほどさらに聡明である自分を押し出すことができる。全く際立って有能であるということである。こんな風に諷刺詩を使うのはダン一人ではなかった。実際に、ガスコインからマーストンにいたる英国の諷刺詩人たちはみんなダンのように野心に溢れた若者たちだった。売り込むために原稿のまま回覧して故意に諷刺詩を非公式に発表した。そのような諷刺詩はその時代の深刻な不満を反映しなかったが、宮廷のグルー

プの中の自己宣伝にはなった。それは裕福であるとか立派な家系の出身ではない者にとつて必要なことである。ダンは目上の人の歓心を買おうとしたとき、素早く諷刺詩の筆を折った。続けていけば、無謀ということになっていたのであろう。その上、権力の中核たる宮廷があまりにも魅惑的すぎて、どうしても諷刺することができなかつた。ジェームズ一世の宮廷はエリザベス朝と比べるとかなりはつきりと墮落し腐敗していたが、ダンは決して危険を犯してまでも批判しようとはしなかつた。その代わり、官職に就くために自分のできる範囲であらゆることをした。

ジェームズ一世時代は多くの大胆で社会意識を持った諷刺詩人たちを輩出したが、ダンや人目を引くエリザベス朝の不満分子たちとは育ちが違つた。比べてみれば不満分子たちは律儀だが文才は無かつた。たとえばジョージ・ウィザーは『濫用』の中で教会と国家の濫用を糾弾し、投獄された。『梟』のドレイトンと『郭公』と『乞食の猿』のリチャード・ニコルズは宮廷と行政当局に激しい攻撃をした。ダンはこの作家たちとの関係は全くなかつたし、おそらく、ジェームズ一世に賛同していたのであろう。国王はそのような輩は「悪臭を放つ種子のごとく引き抜かれる」<sup>(17)</sup>刑に値するとしていた。説教集の中でダンは厳しく諷刺を糾弾する。

一五九〇年代にダンが自分の諷刺詩のペンを執っていた当時、このこと全ては未来の時代の出来事であつた。しかし、それはダンの諷刺詩が反体制へどのような距離を持つていたのかという疑問を確かめるのに役立つかもしれない。一五九六年にダンの行動と自己昇進の渴きを満足させる好機が訪れた。艦隊がスペイン本土を攻撃するために準備されていた。英国の軍隊はエセックス伯の指揮下にあ

った。冒険と金が必要であった人びとが参加するために集まった。紳士階級の義勇兵として法学院からたくさん来ていた。「三百人の緑色の帽子を被った若者は飾り羽根や金銀のレースを着けていた」と証人の一人が描写した。この中にダンはいた。たぶん大学時代の友人で当時エセックス伯の秘書官であったヘンリー・ウォットソンを通して伯爵に個人的に紹介されていたのであろう。

もし野心のある若者であれば、エセックス伯は従うにたる人物であつた。英国で一番の権力者になることを目指していたし、順調に歩んでいるようにも見えた。伯爵の武勇、若さ、勇気がエリザベス女王を含めあらゆる人びとの目を釘付けにした。エリザベス女王は伯爵の部下たちを愛し、伯爵と一緒に座り「トランプや他のゲームをして遂には朝になり鳥たちが歌うこと」もあつた。女王の主馬頭として国事の折りに女王の傍を歩いた。その時代で一番立派な剣士であり、武道においても名声があつた。フィリップ・シドニーが戦死したオランダ遠征で武勇をたてナイトの称号を与えられていた。大衆は伯爵を敬愛した。そして堂々たる風采にも係わらず、政治的狡猾さを発揮せずにはいられなかつた。事件を指揮できる情報源を握りたい一心で、集中諜報局を組織し、国際的な情勢について情報を手に入れていたグレイ法学院から到る所に流していた。一五九三年までに伯爵は枢密院顧問官に昇進して、「あらゆる情報はすべて彼の手中にある」と言われた。さらに官職推挙権の心優しき推進者で、自分を慕ってくる人間には寛大に報いた。

ダンにとってスペイン遠征は類稀な好機に思えたに違いない。いったんエセックス伯の注目を得ることができると、ダンは何を望んでいるのか知ることができた。兵士になる動機についてクリストファー・ブルック宛に手紙で、「破産状態で、賞金の望み」を持ちな

がら、自分が貧乏で無名であることをはっきりと述べる。確実と言ってよいもう一つの理由は、忠実な英国国民として自らを知らしめ自分がカトリックで育つたことに関するいかなる疑いも取り除くことにあつた。官職の妨げになるかもしれないからである。スペインと戦うことで、自分の心が正しい立場にあることを示そうとした。こんな風に整理することで、「我らが服従する英国、我らそのもの、我らが持つ」詩行は遠征についての詩に含まれているが、おそらくその予期せぬ愛国的発露の説明がつくであろう。

当然のことながら危険はあつた。殺されるかもしれないなかつた。しかし、それさえ観念的に訴えているだけのようにも思えた。ブルック宛の動機のリストの中で「正しい死」でありたいという強い願いを述べる。艱難辛苦を考えることで再び奮起した。「絵姿」というエレジーからダンの心の状態を想像することができる。それは当時實際か想像か分からないが、ある婦人に宛てて書かれたように思われる。

お別れをするが、ぼくの絵姿を受け取ってくれ。

きみの絵姿は魂の住処であるぼくの心臓に住ませよう。

これは今のぼくに似ているが、死ねば生前よりもっと似ることになる。これとぼくの幽霊が一緒になるのだから。

風雪を乗り越えてぼくが帰ってくると、ぼくの手はきつとざらざらの櫛で裂けるか、日焼けし

顔と毛むくじらの胸、それに頭は

心労で時ならぬ徒然の白髪に被われ

肉体は途中で折れている骨を包む袋と化し

火薬の青いしみが肌に広がっていることだろう。

もしぼくの恋敵の馬鹿どもが、きみの愛したのは  
その時の醜い粗暴な男だったのかと責めるなら、  
これに昔のぼくを語らせなさい。<sup>(22)</sup>

引用した最後の詩行の「これに」は絵姿であり、表面上はその詩の主題である。男は出発前に女に贈る。おそらく絵姿は上品な若者であることを表しているであろう。しかし、推測することが出来るだけである。なぜならそれは本来描かれるはずのものとは全く別の絵姿が荒々しい筆致で描かれているというその詩の一筋縄ではない部分だからである。それは戦争とか捕虜になった後で潰され火薬でしみのできた身体になっている自分自身を未来の中に想像したいと思うときのダンを描写している。そしてその逞しい古参兵の様子は読者が感じるように男が実際に手渡す上品な形見より時を越えてさらに感動させずにはおかない。その詩は上品な形見を描こうともしない。その詩の作者のようにダンのエレジーは大胆に未来に執着している。

その詩の終わりは打ち叩かれた年老いた身体の方が「絵姿」より本当はもっと良いのであるという読者の気持ちを確認にする。しかし、ダンが詩の終わりまでその逆の振りをしているのである。絵姿の中の「立派で優しい」外見はミルクのようであったのだし、愛を育てる力がその「幼児期」にはあることを「恋敵の馬鹿ども」に言っただけでやらねばならないと忠告する。しかし、今や彼女の愛は

ミルクで育って十分成長しているものの、

ミルクでは弱くなって不味いように思えるのだ。

ダンが自分で考える毛むくじらの胸、荒れた手、その他ごつごつした特徴によって男はさらに価値あるものになると同時に女性にももっと好ましくみえる。単にカディツ遠征に参加することで恩恵をたくさん受けた。

艦隊は六月に入って出帆し、その月の二十一日にカディツ港で碇泊していたスペイン船をびっくりさせた。砲撃は約三時間に及び、港の河口で停泊していた四隻の大きなガリオン船に向けられた。その船の中に敵の旗艦サン・フェリッペも含まれていた。二隻は捕獲されるのを阻止しようと乗組員が火を放ったが、他の船は英国の軍門に降った。全ての内十三隻のスペイン戦艦と四十隻の商船が破壊され、戦闘犠牲者は莫大な数になった。壊れた船の回りの海は恐ろしく焼けた兵士たちで渦巻いていた。その兵士たちの多くは浮いたまま戦ったとき英国船の甲板から一斉射撃で犠牲となった。さらに死者の数は燃えているガリオン船の中の弾薬庫が爆発したとき、追加された。ダンはその以上の交戦状況の壮観な紹介をすることなどとうていできなかった。

海軍の勝利のあとエセックス伯は直ちに軍隊を岸に進め町を焼き討ちした。夕暮れまでに、町は英国の軍門に降った。英国大尉の一人ジョン・ウィングフィールド卿は町に入るのに馬鹿げたことに馬に乗ったままそれが良い標的になって頭を撃ち抜かれてしまった。それを抜きにしても英国の損失は無視できなかった。ウィングフィールド卿はカディツ大聖堂で軍葬をしてもらい、士官たちは涙に濡れたハンカチを墓へ投げ込んだ。ダンはエセックス伯の注目を引こうとウィングフィールド大尉の英雄的行為と「我らが伯爵」が彼に施した名誉<sup>(23)</sup>についての熱狂的なエピソードを物した。それから勝利者たちは事務的な仕方でカディツの町の略奪を始め、二週間近く

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

もかかったのである。エセックス伯は長く逗留することに賛成であったが、供給物資の問題が困難を極めていた。そこで伯爵は命令を出し、城の防壁のある町は完全に破壊すべきであるとした。教会とそれに類する建物だけは立派に修復された。作業はあまりに徹底して行われたのでスペイン人たちは完全な再建計画に着手しなければならなかった。

英国軍は帰国途中で立ち寄りファアロという無防備のポルトガルの町を破壊した。この急襲で手に入れた略奪品の中に有名なルネサンスの文筆家オロシウス司教の蔵書があった。それをエセックス伯はオックスフォード大学ボドレー図書館に寄贈した。ダンは明らかにこのような行動に興味を示し、フェーロルでスペイン艦隊を攻撃するために別の遠征が次の年一五九七年に組織されたとき、再び志願した。その時のエセックス伯の艦隊はまずい出発をした。嵐に突入していて港に戻らざるを得なかったからである。紳士階級の志願兵の多くは艦長ローリー卿が報告しているように「危険な病氣」にかかっており、「自分たちの高く掲げた羽根飾りや刺繍をした聖職者用の法衣を外して上陸したとき、秘かに辞めて家に帰った」。ダンはのっぴきならない状態だった。『嵐』という詩の中で艦隊の災難を書き上げた。その中で戦友たちが苦しんだ船酔いの苦闘を陽気に嘲ったり、冷淡で機知に富んだイメーヂを充満させている。

そして罪の重荷を持った魂が墓から這い出すように

最後の審判の日に船室から覗く者がいる、  
そして我々のずたずたの帆からぼろきれが落ちる

一年前に鎖で吊るされた罪人のように。<sup>(24)</sup>

それからダンと遠征隊はまた出帆した。ダンが勤務していた一隻を含む今度のローリー卿指揮下の船団は主要戦艦から離れてアゾレス群島に到着した。大西洋の真ん中にあるこの青々として湿気のある小さな島々はスペイン人たちがアメリカ大陸を開拓して以来その宝を積んだ戦艦を迎えに行くお気に入りの港となっていた。英国の私掠船は定期的に獲物を待ち構え、戦艦の間に潜伏して戦闘をしばしば起こした。ローリー卿の小艦隊はこの時セント・ジョージ島沖で大風にあふつかった。それは二日間続き、ダンの一対の詩『嵐』と『風』を結実させた。

この二編はただただ純粋に叙述的な詩であり、強烈な印象に圧縮されているので精神を通してと同時に皮膚と肉体を通して受け入れることになる。述べられている事柄は現実のように予期できず無秩序である。太陽が焦がす肉体、鮫、干からびた川床。『風』の灼熱と静寂の中で船は朽ち果て、ばらばらになっていくように見える。

我らの船の美しさ、装備はことごとく崩れる

宮廷が取り除かれ、劇が終わってしまったごとくに

闘い場所は今や海軍兵のぼろ服を提供する

そして衣類は全てが古着屋

カンテラも使えず、一つ所に、

羽根やほこりが集まる、今日も明日も。<sup>(25)</sup>

これはベン・ジョンソンが諷んでいたダンからの引用詩の一つであった。

しかし、アゾレス群島沖は風もなく、ダンは新しく異国情緒溢れた状況の中にあっても、引用した詩行が示すように頭はロンドン

の生活で一杯だった。宮廷、劇場、古着屋。あまりに自分に夢中になってから、写真に撮ろうとすると目の前の状況についてその心とその心の動きの両方を焼き付けてしまい、二重写しの一齣の効果を導くことになる。アゾレス群島沖の海の風景はエリザベス朝のロンドンの人々の目を通して見られる。その結果、生活が記述されているにも係わらず、エリザベス朝の海軍兵たちが簡単に説明する以上に誰かがあえて奇妙な気候の中にいるという印象は薄い。たとえばアーサー・ジョージは同じ航海に参加して、島々の農業を「美しく小さな隆起する丘や一面の畑、そこにはメロン、ジャガイモ、その他の果物が一杯」と好意的に記録し、夜の虹にとっても心を動かれていた。

私たちが九月十日の夜十二時頃グラティオッサの傍に場所を決めたとき、あらゆる他の虹の大きさや形の中でも月光に照らされた大きくて完全な虹を見た。でも、かなり異なつた色彩だった。なぜなら、それは白っぽくて、火の炎の部分の色彩に近いといつてもよかつた。<sup>(26)</sup>

これは旅行案内書に書かれる類のものである。ダンなら決してこのようなことを書くことはできなかったであろう。なぜなら、頭の中は日常的な先入観で一杯だったから貧農や外国人が何人いようと、彼らを選んで住み着くことになつた奇妙な経緯などに興味を示す時間はない。ダンがその後の人生でヨーロッパ大陸から帰国するとき、丁度スペインに滞在していたのだが、「この土地は決定的に不毛である」と不平を述べているのは象徴的なことである。海外は退屈だったのである。

嵐のあと、エセックス伯とローリー卿の船はお互いを発見して、また離れていっただけだった。もしダンがローリー卿の小艦隊と共に残っていたならフェイヤル島の防壁を大胆に争奪することに参加していたにちがいない。ローリー卿に率いられた英国の小艦隊は集中砲火を浴びて上陸し、猛烈な戦いのあと、スペインの守備隊は退却させられ、森へと逃げた。その栄誉ある功績があまりにも大きかつたから、遅れて到着しその状況に嫉妬もしていたエセックス伯はその攻撃を一人で企てたかどで宮廷の軍法会議でローリー卿を威嚇した。指揮官たちが口論している間にスペイン西インド艦隊は英国の砲弾をくぐり抜けてしまい、アゾレス群島遠征は国家的見地に立てば失敗であつた。しかしながら、全てが失われた訳ではない。というのは帰路の途中その遠征は報告が示すようにハバナから航海してきて「コチニール染料や乗船客が持っていた他の豊富な商品、それに銀、金、パール、シベツト、ムスクそれに竜涎香」を積んだ三隻の商船を襲撃し、略奪した。この種の盗みは英国海運政策の中で重要な行為であつた。しかし、英国人たちは自分たちから事実を隠すように画策したふしがある。たとえば英国人の旅行者フラインズ・モリスンはハンブルクを訪問しているとき、王立海運だと考えていたものが実は外国の人びとには海賊船の一団と見られていたことに驚くと同時にそのことを知って、心が痛んだ。ダンは率直に言つて略奪品について何の後ろめたさもなかつたし、その多くが自分の手に入らなかつたのは残念だと思つただけである。<sup>(27)</sup>

しかしながら、航海は十二分に昇進の目的を達成した。エセックス伯が遠征の間にナイトの称号を与えた若い戦士の一人は英国国璽尚書の息子トーマス・エジャートンであつた。ダンはたぶんリンカーン法学院で知っていたのであろう。今や二人は戦友となつた。遠



『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

征を終えた帰りの何週かの間にダンは若いエジャートンの推挙でトーマス・エジャートン卿(同名の父親)の秘書に任命された。エジャートン卿は広範な権力と影響力を持つ人物であり、エリザベス女王の管理責任者の中で重要人物の一人である。これはダンが待ちに待っていた突破口だった。国書高書の秘書といえは当然と思われるように前途には公職への輝かしい経歴が待ち受けていた。ダンはエジャートン卿のロンドンの住居であるヨーク邸に引越してきて国家存亡の中心にいる自分自身を見出した。ダンは法律の専門家の不正行為を調査するために雇われたのである。「諷刺詩 五」はエジャートンに捧げられていて自分が発見したものを記録している。期待通りに、これは以前の諷刺よりずっと丁寧な書き方であり「最も偉大で最も美しい女王」であるエリザベスが英国での手に負えない墮落には責任が全然ないと明確にしている。しかし、ここでさえダンはカトリック教徒を迫害する政府の役人たちに自分の憤りを抑えることができない。人間の一番の聖なるものを怒らせないのか、とダンは尋ねる。

そう殉教者は

審問官が入って来て、着るもの、大外衣、

本、小祈禱書全と、聖餐のパン皿と杯の全てを

読み上げ、それらを誤解し、

手に入れた費用を尋ねるのを見るときにも。

ダンがカトリックに対して持つ恨みを見えないようにしておくことはさらに機転が必要であったであろう。しかし、ダンが詩を書くときいつも表面に出てきてしまうのは仕方がないことである。

これはダンの諷刺詩の最後になるはずであった。恋愛詩と同様に

この諷刺詩はこっそり友人たちの間でだけで回覧されたのである。「逆説」の教編をウォットンに送るとき、書いたもののどれも写しをとらないことを約束してくれるように頼んでいる。「ぼくの諷刺詩には恐怖が付き纏っているし、エレジーにも。これらはたぶん恥でもあるし、ぼくはどうしても隠したいのだ」英国政府は諷刺詩や愛のエレジーに嫌疑をかけていたし、ロンドン主教の命令で公認の死刑執行人は最近たくさん印刷物を燃やした。エジャートンの秘書はただこっそりと隠れてこのようなものを書くことができた。野心は狡猾さを必要としたのである。

ダンは非難されることもなく一度も詩について言及しないということである。友人たちに詩を送るとき、詩は「光の輝き」であり、「雲散霧消してまうもの」であり、「ことばの羅列」であると言いつくす。もし受けとった者が素晴らしいと褒めると、ダンは「褒められるためにこんな些細なこと」をするのではないと自信たつぷりに一蹴するのである。若者のときでさえ、ダンが戸惑いを隠しきれなかったのは「もつと優れた芸術の種子」が宿るべきだった自分の身体の中に「恋愛詩という雑草」と「諷刺詩という刺」が芽生えてしまったことである。だからこそ詩を書くことの「虚しさ」と手を切るために自分の決意を表明したのである。このように投げ出してしまふことで、いくぶん恥ずかしさを弁護できるのは疑いのないことである。しかし、はつきりしているのは、友人が自分の詩の何編かの写しを持っていても気にならなかったということである。一六一四年に裕福な庇護者にせかされて詩集を作ることになったとき、ダンは友人たちに手紙を書いて自分の原稿を返してもらわなければならなかった。「僕には詩を作る以上に詩を探すのにもっと努力が必要だったという訳さ」と、いつ

もの自嘲まじりに述べている。これだと願う理想像は、詩なんか宮廷のたしなみにすぎないとみる人の姿であった。そしてあまりに広く知られることに用心深くなつた。友人グッドイヤーは励ましてハインティングドン伯爵夫人に詩を捧げるように勧めたとき、ダンは躊躇した。「夫人が僕のことを知っているのは詩人というよりもっと真面目にしていた初めの頃の事だったから」と説明した。「僕は今も威厳があるかもしれないが、夫人が知っている僕に逆戻りするよるに思えないしね」<sup>65)</sup>このような状況の中で詩を印刷してもらうという考えが全く不愉快なものとしてダンを打ちのめしたのは自然の成り行きだった。と言うのも自分が本格的なへぼ詩人の仲間入りをしてしまったからである。庇護してもらうために一六一一年と一六一二年に『周年詩』を快く出版させたことを考えると忸怩たる思いで一杯になつた。「僕があんなにもそれに傾倒したのか不思議であると言いたいし、そんなことをした自分を許さない」と述べている。

詩と詩人である自分自身に対してこうも嫌がるのは、ダンが持っている野心のもう一つの面であつたらしい。詩から連想することといえは自分の性格の中の虚ろいやすいところであつたし、止めてしまふことが政治的であるとも考えたからである。詩を書きたいという気持ちには余りに強すぎて簡単に抑えることができなかつたが、出来上がってしまうと見くびつたり無視したりすることで気を紛らわせていた。二重生活を送っていてダンにとつての詩は公の自分が認めたくない衝動の密かな捌け口になつていたのである。

一方、エジャートン卿の秘書としてエリザベス朝時代で最も有名な反乱の一つの目撃者であつた。ダンの以前の指揮官だつたエセックス伯はロンドンの通りで武装決起を企てたかどで間もなく反逆者として最後を遂げることになつていたが、エリザベス女王の許可な

くアイルランド遠征から帰ってきてしまい、エジャートン卿の責任の下にヨーク邸で囚人となつた。ダンは失墜した貴族に同情はしたものの遠く離れて観察した。どっちつかずの支持をしていた。おそらく『十二夜』の初演があつた一五九九年のクリスマス祭りの宮廷で、ダン「陽気なお祭り騒ぎ」を描写しながら友人に手紙を書いた。そして、「僕のエセックス伯とその部隊がここで霞でないのは天使が霞でないのと同じである。その天使たちは天国から投げ捨てられ戻りそうにないと僕は睨んでいるのだが」ダン自身は投げ捨てられるというつもりはなかつた。一六〇一年にダンはノーサンツ州ブラックリーの国会議員になつた。議席はエジャートン卿の支配下にあつた。同じ年にリンカンシャー州の土地の借地権という英国王の下賜金を賜つた。国王から直接土地を戴いたことでダンは今や自分の名前に「スクワイヤー(郷士)」と書く資格が与えられた。<sup>66)</sup>

しかしダンが手に入れたのはそれまでだつた。丁度一六〇一年のクリスマス前にアン・モアという女性と密かに結婚を決めていた。アンはエジャートン卿の保護の下にヨーク邸に住んでいて、一六〇〇年に亡くなつた卿の二番目の妻の姪だつた。アンの父ジョージ・モア卿は裕福なサリー州の地主で、娘アンは十六歳か十七歳。ダン二十九歳のときである。結婚していることが知れてジョージ卿は怒りが爆発した。そしてダンの世界は音を立てて崩れた。ダンにはエジャートン卿の仕事が解雇され、投獄された。ジョージ卿の気が和らいでダンを仕事に戻そうときたときでさえ、エジャートン卿は頑固一徹のままであつた。ダンが見たように自分の信用を裏切つてしまふ自分自身が信頼の置ける任務に向かないことを示してしまつた。その事実と自分自身を和解させるのに何年も掛かつたが、ダンの公

職への望みは取り返しのつかないまま消滅してしまった。

この大失敗はダンがカトリックで育てられたことに劣らず重要であった。結果的にはカトリックで育てられたことで自分の見方や世界観ができあがっていた。ある点では、その大失敗はそのように教育されたことで出来た傷口を再び開けることとなった。なぜならダンはまるで自分が他の人々とは違う宇宙に住んでいるかのようになり再び引き離され追放されてしまったと感じたからである。ダンの手紙によると結婚に対する義父と雇い主の反応の仕方が衝撃だったことがわかる。そのような反応は予想だにできなかった。自分のことにかまけて旅人のように注意を怠っていたからダンは自分の回りの人々がどう思っているのか気付くことができなかつたのである。エジャートン卿が秘書に復職させるのを拒んだ一つの理由は写すように頼んだ手紙の文面をダンが勝手に変えてしまったことがとても気に入らなかつたということらしい。<sup>(88)</sup>自分がしでかした無礼にダンが気付かないままであったことは予期してよかつたことである。ダンの人生の後半の危機である聖職に就くとき再び自分が十分に知っていると思つた人の反応に驚くことになった。今度はダンの庇護者ベッドフォード伯爵夫人が言つたのである。「ダンのような過去を持つた男は聖職には向かない」と。

しかし結婚したとき当惑させられた恐ろしい不公平感によってダンが新たな孤立感を味わうとしたなら、少年時代の反カトリックの迫害のように再び上手く行くように決心を固め、力強く挑戦的な自我に心の成長を加えることであつた。駆け落ち自体がその自我の表現である。疑問に思うところだが、何故ジョージ卿がその結婚にそんなに反対したのだろう。疑いもなく答えの一つはダンが貧乏で無名であつたことにある。ダンは義父に抗議して手紙を書いた。「情

け容赦のない敵意が、少なくとも僕の負債を二倍にしてしまいました。」しかしダンは負債があることを否定しなかつた。同様に、信仰的反対もあつたらしい。ジョージ卿は自分の娘をかどわかつた男が隠れカトリック教徒ではないかと疑つていた。しかしダンも思い込んでいたようにジョージ卿の心を最も傷つけていた醜聞はダンが道楽者だという評判に掛かつていた。「その過ちは、僕が以前優しい女性たちの何人かを欺いたことに向けられていた」とダンは書いている。

恋愛詩の中のダンの恋の遍歴は実生活に論拠があつたという、その範囲については批評家の間で論争がなされてきた。その詩が自伝的であるとするエドモンド・ゴス卿の説は、率直に言つて嘲笑されてきた。というのは文学者たちが見た大部分はゴス卿が自伝的であるとしたものと比べれば非常に小さいからである。もちろん証拠は僅かである。学生時代のダンについての唯一の第一資料はリチャード・ベーカー卿が持つていたものの一つで、よく引用されるものである。事件後半世紀ほど経つてから書いており、思い出す事と言えばダンが「オックスフォード大学を出て、法学寮に住んで、自堕落ではなく、とても小奇麗にしていた。社交界の婦人方をよく訪れ、劇場にもよく足を運び、奇想の効いた詩を作る詩人であつた」と。<sup>(89)</sup>これでダンが社交界を飛び回る蝶々みたいな男であつたという以上には意味はないし、たとえベーカー卿の貴婦人たちについての言い方が特別に性的なことをさしているとしても単なる醜聞にすぎず、ダン自身が広めている可能性だつてある。なぜなら男友だちの間では結婚後でさえダンはちよつと下卑た振りをしたりしていた。ダンは一六二二年にパリからジョージ・ジェラード宛てに手紙を書いており、くれた手紙に感謝し、付け加えている。僕は君の手紙が気に入っている。「まるで僕の恋人の顔みたいだ、曲線も姿も全て、でも、全

て一緒というのが一番だけだね<sup>(42)</sup>。もちろんダンにはアンと結婚してから十一年間恋人を持つような問題は全くない。すなわち女性の扱いを心得ていたことを知られるのが好きだった男の言い回しそのものである。

しかしもしベイカー卿の証言があれやこれやで物の数にはいらな  
いというなら、ごく普通に見える他の二つの証拠がある。『神学論  
集』の中で結婚について振り返りながら、ダンは自分を「わたしの  
愛情を閉じ込めることで欲望というエジプトから」<sup>(43)</sup>救済してくださ  
った神に感謝する。そしてすでに見てきた『ホーリー・ソネツ』  
の中の一つでダンは「盲目的崇拜」をする中で「わたしの神聖を汚  
す恋人たちのすべて」<sup>(44)</sup>に言っていたことをそのまま神に話す。これ  
らの宣言がなされたことで、エレジーとさらに気紛れな叙情詩の中  
を彷徨い歩く性的に乱れたダンが思い付きの作り話であったという  
考えを退けることができる。アン・モアと結婚したダンは「優しい  
婦人たちの誰も」騙したことはなかったかもしれない。なぜなら自  
分の情熱を低く、安っぽい社会秩序に閉じ込めることができたから  
である。しかしジョージ卿にダンが女たらしだと言いつけにくるに  
はそれだけの訳があった。その上、ダンがアンと一緒にいることで  
いい加減な生き方に終止符を打ったのは確かであると思う。結婚が  
自分の愛情を閉じ込めたという『神学論集』の中の感謝の祈りは『ホ  
ーリー・ソネツ』のように、ダンが信じた自分の行動の全てだけ  
でなく、自分の考えの全ても知っておられる神に向けられた。ダン  
のアンに対する誠実は絶対であった。アンと結婚したとき他のどん  
な女性も求めなかった。

しかし結婚した初めの数年間、二人は貧困と不安を耐え忍ばねば  
ならなかった。最初友人やアンの親戚の慈悲に縋って生活した。し

ばらくしてミッチャムの小さな切妻造りの小さな家に引越した。ダ  
ンはそれが嫌だった。田舎で文明社会から切り離されたと感じたし  
その建物は湿っぽくて不健康で身体に良くなかったからであった。  
書斎はその地下にあり、そこから有毒な蒸気が発散していた、ある

いはそのようにダン自身が想像した。落ち込み、病気になって、と  
きどき自殺する誘惑に駆られた。もっと悪いことに子供がどんど  
増えていった。「僕は木のように立ち、一年に一度、果実は全く付  
かないのに子供という実はある」と友人宛てに気落ちして手紙を  
書いた。「実(マスト)」とは団栗、ブナの実などのような豚の餌を  
意味する。一年に一人という計算はあながち誇張ではない。ダンの  
家族は一六〇六年にミッチャムで三人の子供をもたらし、五年間に  
あともう四人子供をもうけた。この時期のダンに一番近いところを  
伝える手紙の一つは自分の妻が四番目の子供を二階で生もうとして  
いる事実から自分の気持ちを逸らすために一六〇七年の一月のある  
晩に書かれた。アンが出産で死ななかつたから、自分はかろうじて  
自殺せずにすんだのだと書いている。<sup>(45)</sup>定職を持たなかつたから、単純  
に子供たちに食べさせるのに十分与えることが、時として深刻な問  
題であった。もし葬儀の費用が含まれていなかったなら、ある意味  
で子供が一人死ぬとホツとしたのであろう。ダンは厳然として述べ  
た。「もし神が私どもに万が一埋葬でもって安らぎを与えて下さる  
としても、それさえどのようにやるのか分からないのです」<sup>(46)</sup>

自分の子供たちについてこんな風に不機嫌に言うのはいかにひど  
い失敗と恥辱であったかを示している。ヨーク邸の温かく輝かしい  
ところから追放されて自分自身が扶養家族たちに囲まれた惨めな存  
在であるのを知ったし、その家族の惨めさのゆえにダンは全てのあ  
まりにもあからさまに報告する責任を持ってしまったのである。手

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

紙の中では若い父親から期待するような子供たちや妻の愛の中にある自然な喜びを一度も表現していないように思える。ダンの生活の全ての部分は欠乏と失敗という腹立たしい意識とによって荒れ果てていたようである。ミッチャムの小さな家から書いた最も落ち着いた手紙の中でさえ不満を見つけることができる。ダンにはグッドイヤーに言う。「僕は居間の暖炉のところで書いていたのだけれど、三人の遊び回る子供たちは騒いでいるし、アンもそばにいて、僕はアンを惨めな運命に引き入れてしまったから、アンに僕の友人を紹介したり、議論に加わってもらおうような、あらゆる誠実な知恵を絞って、努力してアンから惨めさを隠さなくてはならない。」この記述から分かるように、実際にダンの妻と同じ部屋にすることが、せめてもの優しい心遣いであった。ダンの手紙とか他のどんな資料からもアンはダンが詩の中で描いた女性と同じように影を残していると言っている。アンは「オランダの義理の弟ジョン・オランダ卿は一六二二年にアンが詩の中で描いた女性と同じように影を残している」と言っている。アンは「女性の死産した子供を埋葬するのを記録するとき、アンは「女性の中で一番の人」だと述べた。ダンが証人となっているのを知ることができる。」

ここで賞賛すべき彼女が僕らの精神を  
神を求めるように刺激した。

このような仄めかして女性としての忍耐、不屈の精神、献身、優しさについてイメージを打ち立てるかもしれない。しかしダンの妻について確実に知っていることといえば、いつも妊娠していて誰も彼女の個性についてどんな印象も後世の人のために記録していないと

いうことだけである。ダンがすぐにアンと一緒に閉じ込められていることに飽き飽きしたことは明らかである。もちろんそのことについて特別に驚くべきことがあったとか、恥ずかしいことがあったという訳ではない。ダンは気性が激しく、気が変わりやすかったし、飽きることのない精神的な精神を持っていた。ダンの注意を引きつけるために、おそらく事実上教育を受けていなかったのにアンは大変な物知りでなければならなかったであろう。ダンは確固として女性の劣った地位とか能力について保守的見方を持っていて、妻は貞節で地味で忠実で静かであるべきだと信じていた。機知、学識、雄弁、音楽のような優れた特技は全く必要がない、と断言した。知的な会話とか分かち合う文化的関心事は明らかにダンがその当時、結婚から得ることを期待した喜びの中に入っていないかつたし、この点でダンの見方はミルトンと比べてみると女性に対して差別感があったことに注目するのは価値がある。ダンはどんな夫もほとんど暫くすると性と従順にうんざりしてしまうことを理解していたからである。

アンは家族の人たちに手紙を書いたとき、十分に理解できるダンはアンが人生で可能な限り求めることのできる全てである振りをした。「私たちはかつてお互いに嫌がっていたほどには、安っぽくお互いを利用しなかった。」ダンは非難がましく自分の金持ちの義理の兄弟を安心させた。しかしもつと親しい知人たちに洩らしたようにその状況はロマンティックではない。グッドイヤー宛てに手紙を書きながら、ダンは社会との繋がりや会話をすることの必要性について考える。ダンが認めるように自分の家族ができたことで孤独が癒されるかと思つたかもしれないが、しかし悲しいことに実際はそうはならない。後の手紙でなお別の子供が生まれたことを知らせた後、

ダンはかなりはつきりと自分が妻を傷つけないけれど、暫くのあいだ妻と離れられたら嬉しいと述べる。「私は今自分に降りかかっている一番幸福なものが二つある。男やもめになることと私の妻が生きていること」<sup>63</sup>。

ダン是不誠実ではなかった。単純に社交的だったのだ。生き生きとして知的な男性の間にいるのを好んだ。ロンドンで二つのクラブに入っていた。一つはフリート通りのミドル・タバーンで会合し、もう一つは人魚亭である。会員はダンの親しい友人たちが含まれていてグッドイヤー、クリストファー・ブルックそれにまた宮廷人や弁護士それに文学者たち、その中にミドルセックス伯爵になったライオネル・克蘭フィールド、財務官で市職員のアーサー・イングラム、ヘンリー・ネヴィル卿、ベン・ジョンソンやイニゴ・ジョーンズがいた。<sup>64</sup>アンはダンがこの仲間の中に見出す心の高まりに太刀打ちできなかった。「彼女は国のすべて、ぼくはすべての王様。ほかのものは何もない」という恋愛詩のこの世を抹殺してしまうような情熱はダンの結婚生活の現実には呼応していない。あるいはむしろもしあったとしてもそれが詩に呼応しているのは全く単純な形ではない。ダンが出世を棒に振ったその女性との十分に満ち足りた生活を言いふらせば、ダンの着想がこの世の悲惨さに直面する挑戦的な応答になったかもしれないのである。そして結局のところその女性がダンにとって全てではなかったということを理解することによって、さらに挑戦的になったかもしれないのである。

しかし、たとえダンの社会に繋がりたいという願望がアンから自分を切り離さなかったとしても、一家の稼ぎ手としての義務は果たされたであろう。ダンが望んだ仕官の道は全体として宮廷の仲間を思い通りにできることだった。彼らの近くにいて注意を引こうとし

なければ全く好機を生かせなかった。従ってダンはストランド街に居を構えた。ミツチャムには馬でたったの二時間であり、いつも緊急に家に帰ることができた。しかしもし誰かが付き合うようにとお金を払ってくれるなら、思い切つてそうする覚悟でいなければならなかった。一六〇五年から六年にダンは海外に約十二カ月間いた。若いケント州の男爵ウォールター・チュート卿の同行者としてフランス、イタリアおそらくスペインにも旅行した。別に延期していたヨーロッパ大陸の訪問があった。この時は一六一一年から一二年の約九カ月でロバート・ドウルリー卿のお供の一人としてであった。

かねがね実務に係わる人たちと上手く付き合つて、公職に就きたいと願っていた。自分の家族を養う必要があつてなおさらダンは野心家になった。悪い時代で、就職先が全くなく憂鬱がダンを押しつづけた。自分が不必要となつていていることに愕然とした。自分自身であることが徐々に小さくなつていった。運命が自分を「この世のどこかというよりもむしろこの世の病氣そのものに」してしまつたのだと感じた。「もし私が前の寝ずの番で私が何をしたのか、あるいは次の寝ずの番で私が何をするのかを自分に問うなら、私は何も言うことができない。もしも私が誰も傷つけることなくそれを通してきたというのなら、私の窓の蜘蛛がそのようにできるかもしれない」<sup>65</sup>。

落胆からくる一時的興奮状態の中で、ダンは成功への梯子に再び自らの足を掛けるために葛藤した。結婚してから一六一五年に聖職に就く間の十四年は、ダンに代つて奮い立ってくれる社会的に身分の高い人々に媚びたりおべんちゃらを言つたりするための気違いじみた企てで一杯である。この人たちの中に書簡詩の大部分と残つてい

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

る手紙のかかりの割合の受取人が含まれている。最も定期的に文通したのはヘンリー・グッドイヤー卿であり、ダンは毎週火曜日ごとに手紙を書いていた。これらの手紙は他の誰かに宛てたものよりもっと親密なダンを表しているし、限り無い愛や信用の証拠になると言つてよい。一目見たところグッドイヤーはダンのような知識人にとつては奇妙な友人の選び方のように思えるかもしれない。威厳があり、楽しむのが好きなウォリックシャー州の地主で鷹狩りの熱烈な愛好家で、ジェームズ一世統治の初期の間、宮廷での仮面をつけての軽々しい言動をする中で一番の人物であった。疑いもなく文筆家としてはダンより劣っていたので、グッドイヤーは自分のためにダンに手紙を作つて貰っていたのだ。同様にダンの手紙から語句や文章を盗む癖があつて、それを自分自身の詩や手紙に使つたりした。<sup>56)</sup>しかしながらグッドイヤーはとんでもない間抜けでもなかつた。教養はあつたし、識別力はあつた。「友人や本を上手に選抜して」ベン・ジョンソンの賞賛を得たし、ジョンソンもまたグッドイヤーと数日鷹狩りをするので、その気晴らしが何故賢い人たちにそんなに人気があるのかを覚えたと言つている。<sup>57)</sup>グッドイヤーは向こう見ずなほど寛容でもてなし上手であつたし、贈り物や融資によつてダンは不運な年月を通じて助けられた。結果的にグッドイヤー自身が借金をするはめに陥つた。

その友人の金遣いの荒さがダンを心配させた。ダンは忠告して浪費癖を止めさせるために海外旅行をさせた。これは著しく寛大な忠告ではあつた。なぜならそれに従えばダンは恩人を失うことになるからである。しかしいつもグッドイヤーと一緒に先ず一友人であり、その後で一従者であつた。ダンがグッドイヤーに宛てた書簡詩は欠点について遠慮のないものである。その文面は率直さにキラキラし

ている。それがダンの詩の一番いいところである。そしてその正直さと同時に、その特別の簡潔さを私たちが公平に判断するのを認める時である。その書き出しはダンがあまりにも頻繁に使う手ではあるが、動きの無い眠くなるようなリズムを喚起し、そのリズムに逆らつてグッドイヤーに警告する。

誰が過去を、次の年の形にするのか。

新しい頁をめくらず、なお同じものを読むのか

見てきたものを彼はまた見、聞いてきたものを聞く

そして彼の人生にする。だが一対のガラス玉なのだ。<sup>58)</sup>

その詩の最後の連から知ることができるのは、グッドイヤーがこの機会にダンを伴つてミッチャムに行く約束をしたが、それが出来なかつたということである。その代わりダンが帰宅途中で書簡詩を作つて、まるで子供をして旅行をしていたかのように全体として心の中に友人を思い浮かべた。

でもこのように貴方が約束を守るように致します。

貴方がまだそこに居たとしても、馬に乗つたお傍にいる  
貴方が少しも動かないとしても、種々の思いの中で  
貴方は私とミッチャムに來た、そして、ここにいます。

その最後の「ここにいます」の勝ち誇つた、出来そうにない断言は典型的である。手紙が、ある種の恍惚のうちに離れている友人たちの魂を結び付けたのだということはダンの好きな理論の一つであつた。冠亭や人魚亭のように、そのような考えで「孤独という欠陥」か

ら脱出することが出来たのである。ダンにはグッドイヤーの場合と同じようには誰ともこんな風には感じなかった。テーブルの上のグッドイヤー宛ての手紙を見ることで「満足」した。たとえそれを送る手段がなかったとしても、とダン<sup>60</sup>は言った。そのことでグッドイヤーからの貴重なものを部屋にもたらした。

グッドイヤーの気前の良さは非常に貴重であったけれど、ダンが彼を愛する気持ちはその時、単なる報酬目当てではなかった。グッドイヤーが本を贈り物としてくれたことでミツチャムの書斎は「綺麗な図書室」になったが、それ以上にグッドイヤーが持っている知性や同情してくれたり賞賛してくれることが大きな宝物にさえなった。グッドイヤーが持つ「歓喜への自然な気質<sup>60</sup>」はダンのより暗い気質を引きつけた。アーデンの森のポールズワースにあるグッドイヤーの田舎家でゆったりと、呑気に生活することで、ダンにはミツチャムの湿気や金切り声をあげる子供から解放されることになった。そのうえグッドイヤーは申し分のない人々を知っていた。ジェームズ一世の諜報員としてグッドイヤーは権力者たちと交わって、好機が訪れるたびにダンのために彼らを説き伏せた。「私は君に借金をしている。宮廷の友人たちが私のために何をしてくれようとも<sup>61</sup>」とダンは白状している。グッドイヤーは命綱であった。

グッドイヤーを通してダンは新たな庇護者となるベッドフォードのルーシー伯爵夫人を紹介してもらった。彼女に御機嫌を伺う詩人たちの言葉を信用するとすれば、彼女はジェームズ一世の宮廷の中で優秀な若い女性の一人であり、才能に恵まれた美人であった。宮廷の仮面劇でも目立った演技者であった。ある機会にダンはグッドイヤーに「仮面劇の乱痴気騒ぎのとき<sup>62</sup>」彼女宛ての手紙を渡してくれるように頼んだ。一五八一年生まれでエクストン州のハリントン

男爵の娘は十三歳でベッドフォード伯爵と結婚した。伯爵はエセックス伯の反逆に係わったことでしばらく投獄されたが、ルーシーはジェームズ一世即位の最初の日の謁見者の中にいて女王寝室頭に任命された。一方ルーシーの両親はヘンリー八世の娘エリザベスの養育係をしていた。ルーシーが女王と親密な友情関係にあったことで自分が重要人物となつていった。自らを教養の高い趣味で飾って、作家たちに自分の家をいつも訪れるように勧めた。ウォバーン寺院にある彼女の肖像は長い鼻をした丸みのない顔の女性であったことを示している。人前を気にしたように長く考え込む姿勢で手に頭をもたせかけている。捧げた詩の一つ中でジョンソンは彼女が「学識ある男勝りの魂<sup>63</sup>」を持つていたと歌う。それは彼女が聞きたがっている類のお世辞だと確信できる。しかしお世辞に対する彼女のお腹の中を考えると、彼女の知性を全く偏見なく見るのは難しい。ダンの書簡詩は彼女が「神の傑作」であり、彼女の友人たちは彼女が「選んでくれた」ことで祝福された「聖者」になると書いている。一連の似而非宗教の熱烈な褒め言葉は明らかに機械的であり、目を瞑つていても言えるような心の籠もらない単調な言い方である。

どのようにベッドフォード伯爵夫人がこのような賛辞を受け取ったのかという疑問とそれがどんな種類の関係を表現しているのかということは途方に暮れる問題である。しかしダンが尊敬を持つことと媚び諂うことの両方に響くように努力することは、自分が庇護者台帳に載せてもらえるのと同時に尊敬をも勝ちえたいとする気持ちの表れであり、伯爵夫人がこの勇敢な当代の詩人を胡散臭い過去があるとはいえ自分のお気に入り桂冠詩人として抱えることを喜びとしていたようである。彼女は自分で詩を書いて一度トウィックナムの庭でその何編かをダンに見せたのである。ダンは飾らずに賞賛



『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

して何編かを写させて欲しいと頼み、こっそりと持っていることを約束した。ダンの手紙からそれが明らかになるのだが、伯爵夫人の詩はダンか、ダンの詩に関する賞賛<sup>(65)</sup>であった。彼女がベン・ジョンズにダンの諷刺詩の写しを自分のために取ってくれないだろうかと頼んでいるのを知る。<sup>(66)</sup>その時、彼女はあたかも自分が詩人たちと同等かそれ以上であるかのように付き合っており、自分自身の作品を口を極めて褒めるようにして満足感に浸っていたらしいのである。

ダンが伯爵夫人と関係があることが分る一つの偉大な詩が『トウイクナム庭園』である。

ため息に吹きやられ、涙におぼれて今ここに、

僕は泉を求めてやって来た。万病に効くという香油を、

この目にこの耳につけようとしてやって来た。

しかしああ、自分自身を裏切って、

僕はすべてを毒に変え

マンナをも苦汁に変えてしまおうという、

あの蜘蛛の愛をたづさえて来た。

またこの庭園が真の楽園だと思えるように、

蛇まで連れて来てしまった。

僕はむしろ冬の暗さが庭園の輝きを包み、

嘲弄をあびせたりしなくなつて欲しい。

こんな恥辱はうけたくないし、

この庭園も去りがたいので、

愛の神よ、僕はこの庭園内の何か感覚をもたないもの、

そう、マンドレイクにでもなれば庭土の中でうめきましょう、

または岩清水にでもなつて  
一年中泣いて暮らしましょう。

恋する男たちよ、

ここに水晶の瓶をもつて来るがいい、

そして愛の美酒である僕の涙を持ち帰って

君の恋人の涙と味わい比べてみたらいい。

僕のと味が違っていたら

それはみんなその涙。

ああ、心は目の輝きとなつて現れないし、まして

女心を涙で判別するなど出来はしない、

影だけでは女の衣装が分からないのと同様だ。

ああ、女心の難しき、貞操を守るのは彼女だけだが、

貞操大事のそのために、僕は恋い焦がれて死ぬのです。<sup>(67)</sup>

〔西山 訳〕

注目すべきことに、この詩がその題名以外ベッドフォード伯爵夫人に關係していることを示すものはこの中には何も無いということである。(偶然だが、それは同様にその日付けへの手掛かりを与えてくれる。伯爵夫人は一六〇七年になつて初めてトウイクナム庭園を手に入れたからであり、それゆえその詩はそれより後になるに違いない。それはダンの中年の初めに属する。)ほかのあらゆる点でその詩はそれが元になつた状況に追いつかない。その憂鬱で困惑した思慕は少くも腰巾着の詩人が書いた賛辞のように響かない。ダンが伯爵夫人宛の書簡詩に対して適切に判断した賛辞の流れは幸運にも枯渴していた。その代わりダンの自我が肩代わりしていた。ダンが自

分自身の詩の中心になつて自分が補助的役割であることを忘れてしまつていた。ダンは毒氣と死を携えて、その庭園を影のように大股で歩む。庭園の悲しみの中心で、巡礼者たちが訪れる永遠の哀悼の像となる。伯爵夫人と夫人に関する全ては脇に追いやられてしまつてゐる。ダンは実際のところ伯爵夫人と恋に落ちてはいなかつた。(ダンは自分の妻に愛情を傾けることができたことで神に感謝した、感謝したのを私たちは見てきている。)そしてたとえダンの方に気持ちがあつたとしても、ベッドフォード伯爵夫人の夫への忠誠心が自分には不都合であるという仄めかしは社会的身分の違いを考えなくても、馬鹿げた見当違いであつたであらう。しかしダンは詩の中で自分自身を変身させて恋人になる。物乞いをする従者にすぎないといふ屈辱的な事実を乗り越えるためだつた。ダンのしつこさと悩み、恥、自己嫌悪、嘲笑される感覚は偉い人の後に付いて媚び諂つてゐる普通の多くの人全ての中にある要素というより、むしろ無駄ではあるが英雄的愛のしるしとなる。この点でその詩は不真実の勝利である。芸術がそうあるように、その詩は現実を救うし、現実を堪え得るものにする。その虚構を通してダンは自分の人間性を回復してゐるのである。ベッドフォード伯爵夫人は『トウィクナム庭園』を見たことがあつたのか。そうは思えないのである。しかしダンは確かにある時、夫人の不興を買つたことがあり、ダンがそのことについての話し振りにから夫人の友人がいるところでは十分に効果的に隠して絶望してゐる恋人の詩的役割を演じなかつたことを推測するかもしれない。ダンは一六一二年に友人に宛てて書いて自分が女性の庇護者に気に入られていないことを伝えている。「しかし私はこれまで夫人に向かつて不躰すぎたし、それ故にこの練獄の苦しみを受けてゐるのです。」<sup>60</sup> 特にもしベッドフォード夫人がそのことで嘲笑されるように

見えるのなら、心安さを大目に見ることを当てにされはしなかつた。その上、年を経るにしたがい伯爵夫人は徐々に取り澄ますようになつた。一六一二年に重病になり、清教徒の聖職者ジョン・パーガスが病気の夫人に付き添つてゐた。彼の精神的な助言は深く夫人を慰めた。再び宮廷には出ないことを誓わされ、守らなかつたけれど夫人は敬虔に化粧をするのを止めた。夫人の様子は化粧をした顔をした人たちの間にあつて非常に奇異に見えたと報告されてゐる。

ダンが期待したほどの額のお金を夫人から手に入れることはなかつた。夫人はダンが英国国教会の聖職者になるといふ計画を聞いたとき、ダンの負債を全て支払うと約束したけれど、後でそのことをよく考えて、たつた三十ポンドしか寄付してくれなかつた。そして驚くべきことに、ダンの以前の生活の仕方について度量の狭い考えを述べたのである。ダンはかなり慌ててしまひ激しくグッドイヤーにパーガスが口出しをしてゐる聖性について書いた。ダンはパーゲスを胡散臭いと思つてゐたが、ダンの意に反して伯爵夫人を自分の庇護者にしてしまつてゐた。細心の注意を払つてダンはグッドイヤーにその手紙<sup>61</sup>を燃やしておいてくれと頼んだ。彼はなお多額の金のためにベッドフォード夫人に接触するかもしれない。残された一連の腹藏無く書いた手紙で夫人が与えてくれる報奨金がこれを最後に不意になつてしまふ。

ダンがベッドフォード夫人に結びついたのは本質的には仕事上のことであつたから、もしそれが価値あるように思えればダンが同じような忠誠心をもつて他の主だつた夫人たちに売り込んでかまわなかつた。もしそうでなかつたならベッドフォード夫人が知つてしまふことになる。ダンが忠誠心をもつてしつこく追い求めた女性の庇護者が詩人のジョージ・ハーバートとチャーベリーのハーバート

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

卿の母であるマグダレン・ハーバート夫人であった。ダンは結婚する何年前、夫人にオックスフォード大学で会ったことがあったらしいが、一六〇七年になって初めて二人は再び紹介された。ダンは繋がりを持つために努力をした。偶然、その年の七月十一日と八月二日の間に書かれたハーバート夫人宛の四通の手紙が残っていて、ダンが夫人の超自然の美徳に驚いていることや自分がすでに受けた恩恵に感謝したり、夫人を立ち去らせない決心をしていることなどが記録されている。ダンは「ほとんど毎日」書くことを決心したと述べている。夫人はダンの言によれば「一つの世界だけではなく、世界の女王」である。

ダンは最初の宗教詩『ラ・コロナ』の連作を夫人にも送った。「もしあなたがそれらを価値あるものだと思うのなら、あなたの判断とあなたの庇護に」に委ねるといふ控えめな手紙が添えられていた。次の年、長くやもめだったハーバート夫人が近く再婚する予定であることをダンは聞いた。選ばれた夫はジョン・ダンバーズ卿で夫人の歳の半分であった。このことが醜聞となった。しきりに喜ばせようと、ダンは間の抜けた、観察するだけの書簡詩(M. H. 夫人へ)でその出来事を記録した。そこでダンはハーバート夫人を密かに調査し、誰の手紙にキスするかを指摘するために書いているその書類を知らせる。ダンは彼女の恋人の存在を発見したいと思っていると説明する。なぜなら

私は彼女が選択するのをとても願っているから  
私は彼女に愛される人を喜んで愛するだろう。(70)

もちろんダンの意図するところは有力な友だちのリストにジョン卿を付け加えることであつた。この詩の中で上手にやった。

ダンとハーバート夫人との交友は彼女の歓迎の刷り物とは違って唯一の価値ある項目を産み出したが、それが独特で全体的にダン風の詩、『秋の人』<sup>(71)</sup>である。その詩は『トウィックナム庭園』が実際のベッドフォード伯爵夫人に關係しているのと同じく密接に実際のマグダレン・ハーバート夫人に關係している。すなわち全く關係ないということである。ダンの友人アイザック・ウォルトンはハーバート夫人がその詩の主題であるなどと記録を残したり、その詩の編か二編の当時の原稿が題名に彼女の名前を入れていたばかりに、私たちはそれがハーバート夫人についてのものだと思ひ込んでしまったのである。事実、学者の中にはなおウォルトンとその原稿を信用せずにウォルトンがその詩の日付けについて支離滅裂になつていと正確に指摘することを選んでいるものもある。ウォルトンが言うところではダンがその詩を書いたときハーバート夫人にオックスフォード大学で会つていて、彼女の息子エドワードが大学に在学していて、当時ダンは四十歳位で七人の子供がいたということである。どちらの記述も本当なはずはない。ハーバート夫人が一五九九年から一六〇一年エドワードとオックスフォード大学にいたのであり、ダンは一六〇一年まで結婚していなかつたのである。

単純にウォルトンはダンの生涯の二つのハッキリした期間をこつちやにしていたのである。ダンがオックスフォード大学でハーバート夫人と会つたとき、結婚する何年も前であつた。その後、一六〇七年の始めダンはハーバート夫人の庇護を頼んだ。『秋の人』がどの時期に属しているのかは誰にも想像できないことだが、その詩は年老いた女性を祝福しているからもつと遅い時期であるとする方がさらにもつともらしく思える。

どんな春や夏の美人にも

ぼくがある秋の人の顔にみたほどの優雅さはない。

それは愛情深く、その女性の雛について思案し、年齢は私たちが到達する「五十歳」である人であると読者に思い起こさせる。その詩を実際のハーバート夫人や彼女の感情と結び付けてみるなら、これはグロテスクなまでに機転が利かないように思えるに違いない。一六〇七年でさえハーバート夫人はたったの四十歳だった。しかしダンは『トウィックナム庭園』の中でのように現実から切り離してしまっている。詩も散文もある手紙にはダンが実際のハーバート夫人宛に出したものであったが、厚かましいお世辞を心配してまわりつく人のしつこさを混ぜ合わせている。『秋の人』の厳しい慰めと枯渴した調子は全く異なった関係になる。『トウィックナム庭園』のように、その詩は厳しく死ぬことに夢中でダンの自我に支配されている。その女性には中年になったことや覚めた情熱について夢想しながら消えている。同様にそれは恋愛詩である。ダンは実際のハーバート夫人宛に書くとき私はあなたに恋をしたなどという振りは全くしなかった。反対にダンは初めから私の妻は私がこの世で一番愛した人であることハッキリと伝えた。しかし『秋の人』は愛の宣言であり、その中に祈り、忍従、優しさが眠りを催すように混じり合っている。

ぼくは極端を嫌う。しかしぼくは一日を過ごすには揺り籠よりは墓石のそばに留まっていたい。

愛の自然の軌道はこのようなものだから

ぼくの愛は常にこんもりとした美しさには懂れず

坂を下り、丘を下りて行くように。

それは二十年か三十年の結婚生活の後で夫が妻に書くことを期待する類のものかもしれない詩である。墓とか雛の冗談はお互いの信頼で一杯になっている雰囲気の中でのみその刃を無くすことができる。

それはまたその詩の書き出しの「秋の人の顔」についても真実である。その表情は侮辱の崖つ淵に進んでいる。ベン・ジョンソンは『静かな女』の中で同じ語句を使ったとき、それを崖つ淵に押しやった。「彼女の秋の顔の水痘<sup>(73)</sup>」と。批評家の中にはベン・ジョンソンの語句をダンの奇妙な書き出しの嘲りの当てこすり<sup>(74)</sup>と読み取っている者もいる。そして正しいかもしれない。しかしダンの語句は嘲りをもともしないからの確に効果をあげる。その表現は長年培ってきた愛と親しい交わりがあるから誤解できないという理解があつて始めて独特の優しさに到達できるのである。ダンのハーバート夫人宛の野心的な手紙の中でそれは醜聞として場違いに見えるだろう。「あなたは世界の君主、秋の人の顔を持つている。」とても考えつかないことである。ダンの詩は生活から切り離されて立つ。それはハーバート夫人との関係を活気の無い牧歌へと作り替えていてそこからは緊急の野心や財政的に独立するあらゆるヒントが取り除かれていく。また偶然にもハーバート夫人に年齢と雛を付け加えることで夫人に対する愛が偏見のない献身的なものに見えるかもしれない。

その当時ダンが援助をお願いしていた貴族たちは全体として魅力的な連中ではない。その中にはハンサムなスコットランドのジェームズ・ヘイがいて、ジェームズ一世が若い男たちに興味を示すお蔭で宮廷の指導的な人物の一人になり、たて続けにドンカスター子爵とカーライル伯爵を授かった。ヘイは多大な額の金を浪費する気前の良さで最も良く知られていて彼の指揮下で行われるジェームズ一世

時代の宮廷の催しを特徴付ける教養のない不謹慎さは新たな頂点に達していた。彼がエセックス邸でフランス大使のために催した饗宴は一六〇〇種類の料理を含んでいた。それを準備するのに一〇〇人の料理人が八日掛かった。一四四羽の雲雀が一品の料理になった。ロシヤから六匹の鮭があり、それぞれ六フィートの長さで全体の支払いは三〇〇〇ポンド以上になった。夕食前として名高い贅沢を紹介したのが他ならないヘイであった。ジェームズ一世時代の貴族社会が完成させた度を越した消費の仕掛けでは、最も無駄なことであった。客は入るなり、金の掛かった御馳走で、「背の高い人が十分に届く高さ」に「積み上げられたテーブルを見ることになった。しかしその食事に触れることが出来ないうちに召使がそれを動かして投げ捨ててしまった。第二の食事は同じように途方もないものであり、客の前に用意される。ヘイのような人物がキリスト教に興味を示すのを想像するのは奇妙であるが、実際ヘイは、ダン宛の手紙の一つでダンを聖職につかせるために説得することを自分の自慢にしている。しかしながらヘイはダンが他の全てのことを試みて失敗したときだけ<sup>(76)</sup>そうしたのだと認めるのを隠そうとはしない。

この一連の心配の多い年の中でダンのもう一人の庇護者がロバート・ドゥルリー卿だった。<sup>(78)</sup> サフォークの地主で癩癩持ちで黙っていることのできないので有名であった。その性格にも係わらずドゥルリー卿は外交官の職を切望した。その野心のために大変嘲笑をかうことになった。勇敢な兵士であったし、数多くのダンの友だちのようにエセックス伯と共に従軍して、ルーアンの壁の下でエセックス伯によりナイトの称号を授けられた。カデイス群島遠征のときドゥルリー卿は歩兵中隊を率いた。ダンの妹アンはドゥルリー

家の近くに住んでいて、パリのドゥルリーの叔父と一緒に働いていたウイリアム・リリーという名前の元諜報員と結婚していた。兄の窮乏を知っていたからたぶんアンは兄を裕福ではあるが大して洞察力もない隣人と結び付けた。ダンには自らを推薦する機会はドゥルリー卿のただ一人生き残った子供エリザベスが十五歳の誕生日を迎える二カ月前に死んだときの一六一〇年にやってきた。

ダンは一度もその少女に会ったことは無かったが、すばやく「葬送エレジー」で少女の思い出を褒め称えた。このことが明らかにあとに残された両親に好感を与えたのでダンはすぐに「魂の遍歴について」と題する『周年詩』の第一を続けて書いた。何か公の記念碑で自分の子供を不滅なものにしたいと願っていたドゥルリー卿はダンを説得しこれらの詩を出版させた。その要求はダンを途方に暮れさせた。というのもダンの詩は人類の頂点としてエリザベスを激賞していたからであり、ベッドフォード伯爵夫人ルーシーやマグダレン・ハーバート夫人がその詩を読んでどんな反応を示すかを考えると困ったことになったからである。しかしながらドゥルリー卿は弔いの仕方に満足したので手厚く礼をした。もしダンがそれを出版するのを拒絶したなら誠意のない者と写ったかもしれない。そこでその詩は正式に一六一一年に出版された。そしてダンがその間に作詩した『第二周年詩』と一緒に次の年に再出版された。

『第二周年詩』は海外で書かれた。というのは一六一一年にドゥルリー卿はダンを説き伏せて自分と一緒にヨーロッパ大陸旅行に誘ったからであった。それで自分自身の外交官上級の資格を向上させようとしたのである。ダンの妻はいつものように妊娠していて、不吉な予感で一杯で行かないで欲しいと頼んだ。しかしダンはドゥルリー卿の厄介になっていたから殆ど選択の余地はなかった。そ

の代わりにウォルトンによるとダンには妻に『別れの歌、悲嘆を禁じて』という別れの歌を書いた。そして大陸に向けて出発した。ドゥルーリー卿とドゥルーリー夫人、召使たち、狩りに使う猟犬たちと鷹数羽が一緒だった。アミアンで冬を過ごし、それからパリに移った。ダンは予想できたように間もなく手紙で海外生活の退屈さに不平を言っていて、故郷の友人からエリザベス・ドゥルーリーの気前の良すぎる賞賛が一般の英国の読者の間ではむしろ騒ぎの原因になってしまったと聞いて心配した。ダンはベッドフォード夫人宛の弁明の詩を作り始め、自分が他の女の人におべんちやらを言うときには本当にそんな意味ではないのですと説明していた。しかし上手くやっつてのけるのは注意を要する事柄だったのでダンはそれを諦めた。執筆でさらに利益をもたらす仕事を実現したのは、ロバート・リッチ卿がアミアンを通り過ぎて、ダンに卿の娘たち、ケアリ夫人とエセックス・リッチ嬢を賞賛する詩を書くように頼んだときである。姦婦として知られたフィリップ・シドニーのステラの娘たちのようでもあった。ダンはこの婦人たちに一度も目を合わせなかったが、果敢に全体に価値のない一連の詩で願いを入れてやった。その中でダンは前代未聞の美しさと徳を自分が喝采して迎えることができるのは、二人が「エクスタシーと啓示」を持っているからだとして述べている。

ダンが賛辞を作りだす緊張は、内なる情熱と愛着を扱うのには何も無かったけれど、たぶんこの旅行の間にダンがパリで見た「恐ろしい幻」についてウォルトンが語る話の中に現れている。ダンが一人で部屋にいと妻が二度通り抜けた。両肩に髪をたらし死んだ子供を腕に抱いていた。二度目の出現で妻は立ち止まり、ダンの顔を見て、消えた。ダンがドゥルーリー卿に自分の経験と話すと、伝令

が英国に送られ、ダン夫人が死産であったという知らせを持って戻ってきた。それはダンが丁度その幽霊を見た時間だった。まるで偉い人に付き添って来たために殺してしまったかのようである。ダンは主形でダンの意識に入り込んでしまったかのようなのである。ダンは主だった友人たち宛の手紙の中で自分の家族のことをいまままで殆ど触れていない。ダンがそうするときには弁解を伴っている。例えば後のアンクラム伯爵でチャールズ王子の王室の職員であるロバート・カー卿宛に書いたとき、ダンはついでに子供の一人が丁度死んだことを知らせ、付け加える。「何故なら私はその子をととも愛していたからです。君に知らせることでその子の思い出に威厳を付けると考えるのです。だからと言って私はそんなに家庭的と言う訳ではありません。その子供はダンが遠慮して詳しく述べていないが、一六一四年に死んだ三歳のメアリーだった。

ドゥルーリー卿のお蔭でダンはどうとうミッチャムの湿気の多い田舎家を引き払う事が出来た。大陸から帰るとダンは家族と共にドゥルーリー通り（敷地は現在ブッシュ邸の隣接地の一部に占められている）にあるドゥルーリー卿自身の邸宅に隣接している家に引越した。ドゥルーリー卿は相も変わらぬ外交的手腕があったけれど、公的な会合で時をうつつさず自ら馬鹿なことをしてしまった。ドゥルーリー卿とダンは海外にいる間、大皇帝侯大法官フリードリッヒ・ヴィルヘルムの住む首都ハイデルベルクを訪れたことがあった。そしてドゥルーリー卿はそこで経験した幾分控えめな歓迎に腹を立てていた。ロンドンに帰って大皇帝侯の宮廷について軽蔑的に語ることはやい公式の非難を受けた。それは特別にまづい躓きだった。フリードリッヒはジェームズ一世の一人娘エリザベス王女の花婿に予定されていたからである。二人は一六一三年聖ヴァレンタインの日

に贅沢な祭りの中で結婚した。ダンはたぶん自分のへまな庇護者から手を切りたいたいと思っていたから、その時の喜ばしい祝婚歌を作詩した<sup>(81)</sup>。喜んでドゥルリー卿の寛大さを利用したけれど、ダンは自己昇進の計画が失敗に終わってしまうのであれば、もつと賢明な友人を見つけないければならないと思い始めていたらしい。幸運なことに、ダンはその途中でドゥルリー卿自身が熱心に求めた正にその仕事を確保したのである。

偶然このようなことが起こった。宮廷で一番権力のある男はロチエスター子爵ロバート・カーであった<sup>(82)</sup>。一六〇三年に小姓としてイングラントにやってきて、王室馬車の傍を走った。しかしジェームズ一世のお気に入りとなつてしまい、皆に知れるような形で相手をさせられ、際限なく王の欲望の餌食になつてしまった。一六一三年までにはロチエスター子爵はフランセス・ハワード夫人に恋をしてしまつて、結婚したいと思つていた。これには二つの障害があつた。第一はフランセス・ハワード夫人の夫がエセックス伯であることだつた。しかしながらまだヴィルゴ・インタクタ（触れられざる処女）であつたという理由で離婚することを求めていた。その虚偽の仮説を街の男たちの幾人かが証明できたと言われている。ジェームズ一世はあらゆる具体的で細かいところに好色な興味を抱いていて、その事例を見ようと命令を発して、執拗にその審議に干渉した。その離婚を強行に無効とするために、自分の意見に賛成の新しい委員たちを任命させた。

ロチエスター子爵の行く手にあるもう一つの障害はトマス・オヴァベリー卿であつた。子爵の秘書であり、親しい友であり、ダンの友人の一人でもあつたが、強行にハワード夫人との結婚に反対してゐた。オヴァベリー卿を追い出すためにロチエスター子爵はジェー

ムズ一世を説き伏せてフランス大使の地位を与えようとした。オヴァベリー卿が拒否すると王の命令を侮辱したかどでロンドン塔に幽閉された。そこで好都合なことに死んでしまった。しかしながらロチエスター卿は自分の仕事となる公職の大部分を助けるオヴァベリー卿の代わりの者に絶望してゐた。ロバート・ドゥルリー卿はこの信任の厚い地位に自分自身を売り込んだ。ドゥルリー卿が拒否されて、ダンが地位を得ようと思ひ、ヘイ卿にお願いしてその寵臣に手紙を運んでもらつた。

その手紙はうんざりすると同時に、厚かましくもあつたが、現存してゐる。神の聖霊が私に下つて、聖職者になつたこと、司祭職の権能においても私は全体としてロチエスター子爵の自由になるであろうとダンは仄めかす<sup>(83)</sup>。驚くべきことに、その企ては功を奏した。ダンを諫めて聖職に就くことを止めさせたが、ロチエスター卿はダンを自分で雇つた。ダンが後で書くことになる新しい庇護者への親書は惨めな依存関係を表している。「私を買つてくれることで、私に別の称号にしてくれることは閣下の喜びでありましたし、貴方によつて生計を立ててきたのです<sup>(84)</sup>」と書く。

エセックス伯の離婚が正式に委員たちによつて承諾されたとき、その判決は信心深い人々の間に広く批判を生んだ。ダンはその弁護の手紙を書くことを申し出て、ロチエスター卿に指摘したのは、私の「貧しい研究」は法律と神学の分野であつたから、私の「弱い弁護」でも価値があるかもしれないということである。しかしながらそれは受け入れられなかつた。その代わりロチエスター卿は祝婚歌を頼んできた。花嫁の個性を教えられると、ダンでさえ扱いにくさを発見したように思つた。出来上りの詩が示されたのはやつと結婚して何週間か経つてからだつた。しかしダンはその事件が原因と

なつた醜聞に言及することを躊躇わない。ダンは公然と「不正の意見」をもつたものとし、花嫁を讃える。（彼女は手首に処女である印である髪を巻いて祭壇に進んだ。）そしてダンにはカンタベリー大主教、ロンドン主教、離婚に反対して主教たちと一緒に投票した委員たちの間の三人の法学博士たちが天国の意志をいたずらに欺こうとしていたことを仄めかす。

勝利の教会はこの結婚を無効とし、  
今や闘う教会はもはや闘おうとしない。

その結婚式は一六一三年のクリスマス次の日、グレート・マグニフィセンスの真つ只中に祝われた。ジェームズ一世は一万ポンドの価値のある王室領地を売って花嫁のために宝石を買った。そしてサマセットのロチェスター伯爵にした。だからフランセス夫人は伯爵夫人のままであることができた。

ダンには庇護者たちに自分のために獲得して欲しいと願う地位について全くハッキリしていた。一六〇九年ダンはヴァージニア会社の秘書官の職を与えてくれるように頼んだ。後にダンはヴェネチア大使にしてくれるように頼んだ。しかしながらジェームズ一世はダンの才能を買ってはいしたが、駆け落ちをして信用の置ける仕事には向かないことを示しているとして頑なに主張した。そして私たちに奇妙な論理のように思えるかもしれないが、ジェームズ一世はダンをそれゆえに教会の職に就かせるように主張したのである。ダンがこの忠告を拒否したのは自分がこの世的に成功する夢にしがみついているだけでなく、聖職という職業は貴族には軽蔑されて

いる上に相応しくないと考えられているのを知っていたからであるのは明白である。ダンは自分が「聖職者たちへの平信徒の軽蔑」と呼んだことに神経質になっていた。聖職者ぶつた術学者よりは機敏で世渡り上手の宮廷人と考えられたいと思っていた。

サマセット伯爵のような強力な味方を得たのだから、ついに野心を実現する視野の中にいたと思えるかもしれない。サマセット伯爵がダンのことをジェームズ一世に取りなしたことは疑いのないことである。しかしながら伯爵の取りなしたことは疑いのないことである。サマセット伯爵に依存していた年の一六一四年はダンの人生において最悪の一つになってしまった。ダンと家族が病気になる。妻は流産した。十一月の息子フランスの死は五月の幼いメアリーの死に続くものだった。費用はロンドンへの引越して増えていた。なぜなら昇進の好機を押し進めるためにダンには外見を整えなければならなかったし、大陸からフランス人の男性の召使いを連れて帰国したのだ。ダンがサマセット伯爵とベッドフォード伯爵夫人宛に書いた懇願の手紙は緊急で恥も外聞もないものであり、書くのが屈辱的であつたにちがいない。

四月にダンはもう一度国会議員になった。縁故によってトーントン自治区の議席を獲得することができた。しかし一六一四年議会は大失敗だった。何らの立法も通過させなかつた議会の記録があるだけである。議会はジェームズ一世が関税の不当な要求をしたことと国王がお気に入り宮廷人の間で貿易独占権を分配したことについての激しい議論で埋め尽くされていた。クリストファー・ブルックや他のダンの以前の友人たちは心底このような国王権力の濫用に反対した。ダンは慎重に黙っていた。議員たちは国王のスコットランドの寵臣たちと彼らが消費する莫大な額のお金に注意を向ける



とジェームズ一世は我慢しきれず議会を七月に解散させてしまった。会期中のダンの機転のきく振る舞いも全くうまくいかなかった。サマセット伯爵はもう一度ダンのために国王を動かそうとしていた時、国王は「わたしはダンを聖職に就けるほうがよいと思うが」と全く疑いもなく明確にした。十二月までにはダンは抵抗を止めていて、一六一五年一月に聖職授任式が執り行われた。

幾分ダンが失敗したのは不運といってよい。というのはサマセット伯爵が落ちた巨人であり、ダンが庇護して貰おうとしていた直後に傾き始めていたからである。その国王の寵臣は事実、軽薄で横柄で強情な若者であった。自己を売り込む厚かましき以外にはほとんど何もなく、一六一四年の歩みの中でジェームズ一世は夢中になっていたとはいえず、このことに気付き始めた。さらに悪いことに八月に国王はジョージ・ヴィリアーズという新鮮で愛らしい若者に目を付けた。若者はサマセット伯爵よりさらに力強く国王の感情を燃え上がらせた。伯爵は嫉妬を募らせて、ジェームズ一世の面前でのあからさまの無礼な態度が容認できないほどになっていた。

一六一五年に破局はついにサマセット伯爵に襲いかかった。トマス・オヴァベリー卿は、その後釜にダンが座ったことになったのだが、ロンドン塔に幽閉されている間に毒殺されたという噂が広まった。サマセット伯爵と伯爵夫人は殺人罪で裁判にかけられた。夫人は夫が有罪であると告白した。二人は死刑の宣告を受けたが、部下の共犯者たちは絞首刑になったにも係わらず、ジェームズ一世は二人の貴族たちを執行猶予にした。二人は一六二二年まで獄にいて、それから田舎で隠遁生活をすることを許された。如何なる疑惑もダンには降りかからなかったし、ダンが殺人計画のどんな企てにも無罪であることははっきりしていたようである。しかしダンが熱心に

離婚問題やサマセット伯爵に向けていった神聖冒瀆と考えるほどの賞賛の言葉に関して伯爵に尽くそうとしていたことを考えると、ダンが成功するためにとった道や援助を受けた人々の道徳心についてはあまり気に掛けなかったのだと推測するかもしれない。しかしその時もダンがしたように私たちが貴族の気まぐれをたよりに生計を立てなければならなかったとしたなら、このような反応を楽しむことはできないであろう。

聖職の道執ることが、ダンにとって自分の野心を正式に放棄したり、縁故関係から得られる非常に確率の高い利点を追い求める決心を弱めることにはならなかった。ダンは俗世間を離れては生きられなかったし、聖職に就くという取り返しのつかない道を選ぶ前にニューマーケットへ馬車で出掛けた。そこにはダンを聖職に就かせようとしていたジェームズ一世が滞在していて、聖職に就きさえすれば必要なものを提供してくれるのかを国王に確かめるためであった。ジェームズ一世は必要な保証を与えた。聖職に就いてからダンはとにかく急いでニューマーケットに取って返した。その結果、国王は約束を守ることができた。ダンは有給の地位であるチャブレン・イン・オーディナリーを授けられた。なぜなら王室のチャブレンは直ちに二つの生計を支えることを許される許可証を買うことができたからである。だから収入が二倍になる。国王はまたダンをケンブリッジ大学の神学博士にする約束していた。大学はこの様な国王の強引なやり方に怒って、ダンの学位提出を拒否した。全く聖職に就く権利など無礼な立身出世主義と見られていたことは明白であった。しかしながら貴族であるダンの友人たちは圧力を掛けて支え、大学副総長が王室命令による学位の提出を命ぜられた。そこでダンは名誉を得たが、全体的には厳しい状況の中にあつた。大学副総長

と学寮長の何人から授与式で「夜と闇の息子」<sup>(90)</sup>として率直にダンのことに言及するのを聞いた。

国王はまたダンに一六一年一月に最初の聖職禄であるハンティングドンのキーストンの司祭館を与えた。数カ月後、ダンの以前の雇い主で、その時はエルズミア公であったエジャートン卿がケント州セヴンオークスに第二の司祭館をダンに贈与した。ケント伯爵はダンが明らかに繋がりを持つとした人物であり、一六二二年ベッドフォードシャー州のブランハム邸を第三の住宅として寄贈した。了解されていたことは、ダンがこれらの田園地区に住む必要はなかったということである。単なる収入源であった。しかしダンは毎年説教をするためにセヴンオークスとブランハムを訪れていたようである。ブランハムの言い伝えによるとダンは訪問した後、馬車にたくさん(91)のキユウリを積んでロンドンに帰って行ったという。

セヴンオークスへ旅することによってダンは長い間ご機嫌取りをしてきたもう一人の高官でドーセット州の伯爵リチャード・サックヴィルとの仲を再開することができた。伯爵の議席はノウルにあった。ダンの自己保存の本能は自分を貴族階級の間にさらに気儘な浪費家たちに自然と引きつけさせてしまったようであり、ドーセット伯爵は悪名高き道楽者であった。伯爵は贅沢なスケールで楽しんだし、妻が悔しがって思い起こすように「槍試合、仮面劇、それに類すること」<sup>(92)</sup>を宮廷の「貴族の作法」で行った。伯爵の負債は立ち上がれない重荷を子孫たちに与えた。ダンが聖職に就く前に、ドーセット伯爵は軽率にもダンにかなりの額の財政的援助をする保証をしたらしいのである。伯爵はそれをゆつくりと履行した。ダンは物事をそのままにして置く男ではなかった。ドーセット伯爵の名誉が掛かっていると主張した。約束の取消はない。なぜなら伯爵の約束は

証人の前でなされたからである。このしつこさにも係わらずダンはドーセット伯爵を傷つけないように注意した。ダンの宮廷理解は一六二四年に実を結んだ。その年伯爵はダンの教会住居の総数に西部の聖ダNSTANの教区司祭館を加えた。それが伯爵の贈り物であった。

しかし初めの数カ年間のダンの主な任務は聖職者としてリンカーン法学院で神学の講義をすることであった。それでダンは必要条件を満たす定収入と自分の説教を聞きにくる都会の洗練された会衆を手に入れることができた。それから一六二一年にダンは大変な褒美聖ポール大聖堂の首席司祭職を獲得した。チズイックの主教座聖堂名譽参事会員という名譽職がさらについている地位だった。その榮譽ある地位に就くことは新しい王室の寵臣ジョージ・ヴァリアースに忍耐強くご機嫌とりをした結果だった。ジェームズ一世は彼にバッキンガム公爵の位を授けていた。バッキンガム公爵のお供をして、ダンは卑屈な態度をとったり、自分自身を「貧しい虫」と描写したり、バッキンガム公爵は自分がどんな昇進でも望むことのできる唯一の庇護者であると断言したりした。ダンは説明する。「この紙切れで閣下の面前に身を置くというこの大胆な振る舞いで私が言うことは、全て自分がどんな種類の器なのかを注意しながら、土塊として隅っこに控えていることを閣下にお知らせすることです。閣下の最も謙虚で最も感謝をし、最も献身的な僕になることがあなたを喜ばせるであります」<sup>(93)</sup>。ダンがまた首席司祭職を得ようとしてバッキンガム公に賄賂を贈ったかどうかは知られていない。もし贈っていないかったなら、ダンが上手に取り入っていたことへの重要な証拠となる。賄賂はこのような契約<sup>(94)</sup>には習慣的な手続きの一部であったのである。ダンが任命されたときに大聖堂建築は危険な破

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

損状態に陥っていて、ダンは一前任者たちが無視していた政策を採り続けた。ポートランドの石の委託荷物はロンドン主教が教会建物を修理するために購入していたものであるが、ダンが聖ポール大聖堂の首席司祭になるとバッキンガム公のロンドンの屋敷ヨーク邸改築のために公爵によって「拝借」された。たぶんこれを口利きをした見返りと考えていたのかもしれない。

だから野心はダンの生活の変わらない要素であると同時に、若い兵士で事務官でもある者を円熟した神学とを結び付ける。野心的な結婚によって自らを破滅させ、自らがその痛手を修復するために野心的に闘うことになった。ダンが恥も外聞もなく貴族を食い物にして出世したという事実は決して避けられない。現代の読者にとってこれは品位を下げ、悲しむべきことのように思えるかもしれない。一人の天才が英国を支配している馬鹿な鳥合の衆や詐欺師や鶏姦者たちの前で無理やり品位をおとしめられたというのがダンの生きた歴史の時代の告発ではないのかと私たちは問うかもしれない。もしダンが書簡詩、祝婚歌、葬送讃歌を産み出す自分の時代をばらばらにしなかったなら、釣合いのとれたもつと偉大でもつと多作な詩人になっていたであろうか。もつと数多くの『ソングズ・アンド・ソネット』を見ることがなかったであろうか。

たぶん同じように納得のいく疑問は、もしダンが強いられて送らざるを得なかった間尺に合わない食欲で寄生虫のような生活がなかったなら、私たちはいったい『ソングズ・アンド・ソネット』など見ることがあったのだろうかということである。次の章で私はダンの詩を現実が課した圧迫と依存関係に対する反動として見ることができると論じようと思う。さらにダンの経験を通して見えてくる

自己中心癖は、その詩を駆り立てるものである。野心と詩が不可分に繋がっている。ダンを私心の無い満足したタイプであると想像することは、不可能である。なぜならそのことで詩人になるためにもつと時間があったかもしれないが、同時にダンが持っている詩的存在の核が無くなっていったであろうからである。ダンが詩を無視したり縮小してしまわざるを得なかった気質そのものがダンの詩の生命力であった。

概略を述べてきた経歴の中でこのことを示す前に、ダンの詩は何時書かれたのかという疑問が残っている。不幸なことに完全な答えは得られない。『諷刺詩』と大部分の『エレジー』は一五九〇年代に属しているのは確かである。『ホーリー・ソネット』の主要な作品群は一六〇九年〜十年に日付けがつけられる。しかし『ソングズ・アンド・ソネット』の間には、正確な日付けを与えることができない詩は一つもない。そのことは全ての学者が賛成している。しかしながらそこにあるこのような証拠はこれらの詩の制作がダンの不満の多い中年へと広がっていることを暗示している。大部分がその期間に属するというものもない。『別れの歌、悲嘆を禁じて』は私が見てきたように、ウォルトンによって一六一一年と全く確実なように日付けをつけられた。丁度ダンがドウルリー卿と海外旅行をする前で四十歳に手が届くところだった。ダンが『トウィックナム庭園』を書いたのは、私たちが論じてきたように三十歳前後であった。ダンに対する当時の間接的な言及はその同じ方向を指している。ダンの諷刺詩、エレジー、エピグラムそれに『嵐』や『風』のような初期の書簡詩は十六世紀の末紀であると大変良く知られていたけれど、ダンがこの時代に叙情詩人であったことを示すものは何もない。反対に十七世紀初期でさえ、ダンの讃美者たちはダンが叙情詩

を書いていたことにまだ気付いていないようである。一六一四年になつてトマス・フレマンは『嵐』と『風』それに『諷刺詩』についてダンを賞賛するが、ダンに「もつと大きな本を書くように」頼んでいる。これはダンが日付けをつけて作詩している全てであると疑いなく信じている。一六一九年にジョンソンはダンの詩についてドラモンドと話をして『メテンプシコーシス』(『魂の遍歴』)『風』そして『周年詩 一二』と『腕輪』について述べているが叙情詩には一つも触れていない。

ダンの叙情詩が回覧されていたという最初の証拠は十七世紀の最初の十年の終わりに出てくる。その時、その一つか二つの詩が詩の本の中に現れ始める。フェラボスコの『ブック・オブ・エアーズ』(一六〇九年)は『終焉』を、そしてコーカインの『第二ブック・オブ・エアーズ』(一六一二年)は『夜明け』、『餌』を入れている。ドーランドの『ピルグリム・ソラス』(一六一二年)は『愛の無限』の脚色したものを入れている。『ジョン・ダンの叙情詩』の原稿への一番早い言及はドラモンドの一六一三年読物の中に出てくる。それは『ソングズ・アンド・ソネット』の多くのものはダンが四十歳の時に書かれたことだけを教えてくれる。

『ソングズ・アンド・ソネット』の日付けの実際の証拠に関して全く存在しない。『愛の高利』は私たちが文字通り取るなら一人の若者によつて書かれたことを知らせてはくれる。しかしそれが分るのもその詩一つである。『聖列加入式』は詩人の中風、痛風、白髪、それに破産した財産について述べているし、また貨幣に刻印した国王の顔に言及している。この最後の詳細は一六〇三年のジェームズ一世の行列の後に書かれたことをかなりはっきりと示しているかもしれない。(すなわち、ダンが三十歳台であつた)そして同じ

証拠により『日の出』はジェームズ一世の愛の遍歴にはつきりと言及していることが含まれている。「全ての王、その全ての寵臣たち」の『一周年記念』もまた一六〇三年以後の詩のように思える。しかしこのような分析は絶対確実ではない。『諷刺詩 二』は確実にエリザベス朝の詩ではあるが、『一周年記念』が語るように全く自然に「王の寵臣」とか「王」について語っている。だからその詩の最初の詩行が決定的に日付けを決めることはない。

一つか二つの詩が特別の問題を提起する。『一周年記念』は捧げられているその女性がダンの妻でないことを示している(二つの墓なら君の屍とぼくの屍をそれぞれに隠さねばならぬ)それでは、彼女は誰なのか、と心配する批評家たちにはずっと尋ねてきた。多くの人々はたぶんこれはむしろ応答詩に対する決まったやり方であると感ずるであろう。しかし、もちろんもしその詩がダンの結婚の後で書かれたことが判明するならば、その時ダンが自らを結婚していない者だと想像する必要があつたという事実の方が興味あるかもしれない。叙情詩を想像の作品だとする覚悟ができていた読者でさえ『聖ルーシー祭の夜の歌』が愛された女性の死を悼んでいるが、ある事実に基づいたものを持っているに違いないということを感ずっているのである。そのように感じると騙されてしまう。結局、ワーズワスにしても進んで自分の描くルーシーを悼むためには実際の死を全く必要としなかつた。しかしダンの描くルーシーの詩が現実に死んだ女性についてであるならば、その時ダンの妻は考えるに値する唯一の候補者である。私たちが知っていてダンが知っていた女性の中で彼女だけが、ダンを巻き込み十分に深くこの惨めな最後に靈感を与えたのである。アンは、なおもう一人の子供をこの世に送り出そうとして疲れ果てたまま、一六一七年八月に死んだ。死産した子供はア

ンと一緒に埋葬され、夫は誇りを持って妻が十二番目の子供を身籠もっていたことを記念碑に記録した。ダンが妻の死について書いたソネットはそこに絶望が入り込んでいるが、誰も十分にダン自身をも愛していないことが分かったことも絡み合っていた。すでに私たちが見たところでもある。その天上の思慕がその詩を少なくとも表面上では、厳しく自殺行為と見られる『聖ルーシー祭の夜の歌』と比べても、もつと希望に満ちた詩となっている。しかしダンの精神の複雑さと不安定さを考えると、二つの詩が同じ時期に書かれたと信じるのは難しくはないはずであるし、ダンの批評家はそのような結論に到達している者もいる。もしその批評家たちの言うことが正しいなら、ダンは聖職に就いてから二年間も『ソングズ・アンド・ソネット』に書き加えていたことになる。

だから『ソングズ・アンド・ソネット』の著者としてのダンを考えるとき、心に沸き上がってくるイメージは、若い道楽者や背信者だけではなく、ミッチャムの湿気の高い書齋でうずくまっている不興を買った廷臣も含めるべきである。愕然として自分の多産系の妻が二階でお産をしている間夜通し見守っている夫。借金や狭苦しい住居や遊び回る子供たちに苦しめられている父親。高貴な人々の思いのままに注意深く書かれたお世辞の歌を持って行っては友人たちを困らせる家柄のよい乞食。庇護者たちのために作った韻文の貢ぎ物とは大変異なっており、後年焼き捨てようとしたが、結局は不滅のものとなった、自ら書くことを見出したその詩を蔑んでいる不本意な天才。

## 一、原注

(1) *Sermons* viii, 180; see also vi, 299; vii, 149.

- (2) *Sermons* iv, 272.  
 (3) *Sermons* x, 96.  
 (4) *Sermons* iii, 71.  
 (5) *Sermons* iv, 149.  
 (6) *Sermons* iii, 329; and *Pseudo-Martyr*, sig. E1v.  
 (7) *Sermons* ii, 291.  
 (8) *Sermons* x, 221.  
 (9) *Sermons* i, 208; iv, 160; iii, 329; Gosse i, 191.  
 (10) *Elegies*, 60.  
 (11) *Devotions*, 109 (Meditation XVII).  
 (12) Clay Hunt, *Donne's Poetry: Essays in Literary Analysis* (New Haven, Conn., 1954), 147.  
 (13) *Letters*, 51.  
 (14) *Satires*, 5.  
 (15) See e.g. *Divine Poems*, 16.  
 (16) *Satires*, 14.  
 (17) See John Wilcox, 'Informal Publication of Late Sixteenth-Century Verse Satire', *HLQ* 13 (1950), 191-200.  
 (18) *Poems of James VI*, ed. J. Craigie (Edinburgh and London, 1955-8), ii, 185.  
 (19) J. B. Black, *The Reign of Queen Elizabeth 1558-1603* (2nd edn. Oxford, 1959), 422.  
 (20) *Satires*, 58.  
 (21) *Satires*, 55.  
 (22) *Elegies*, 25.  
 (23) *Satires*, 51.

- (24) *Satires*, 57.
- (25) *Satires*, 58.
- (26) Arthur Gorges, 'A Larger Relation of the said Iland Voyage', in *Purchas his Pilgrimes* (Glasgow, 1905-7), xx, 66, 83.
- (27) Gosse i, 314.
- (28) Gorges, op cit., 128.
- (29) Fynes Moryson, *Itinerary* (1617), i, 37.
- (30) 'To Mr R. W.', lines 18-21, *Satires*, 65.
- (31) *Satires*, 22-5.
- (32) Simpson, 316.
- (33) Gosse i, 171, 197; and *Satires*, 69-70.
- (34) Gosse ii, 68.
- (35) Gosse ii, 79.
- (36) Gosse i, 302.
- (37) Bald, 107-8, 114, 116.
- (38) L. I. Bredvold, 'Sir Thomas Egerton and Donne', *TLS* (13 Mar. 1924), 160.
- (39) *Letters*, 18.
- (40) Gosse i, 106.
- (41) Bald, 72.
- (42) Gosse i, 300.
- (43) *Essays in Divinity*, 75.
- (44) *Divine Poems*, 10.
- (45) Gosse i, 154.
- (46) Gosse i, 189.
- (47) *Letters*, 147.
- (48) Bald, 253.
- (49) *Divine Poems*, 15.
- (50) *Sermons* ii, 346.
- (51) Gosse ii, 48.
- (52) Gosse ii, 8.
- (53) Gosse ii, 18.
- (54) Bald, 191-4.
- (55) *Letters*, 59-48.
- (56) Bald, 167-8.
- (57) Jonson viii, 55.
- (58) *Satires*, 78-9.
- (59) *Letters*, 11.
- (60) Gosse i, 191.
- (61) Gosse i, 200.
- (62) Gosse i, 182; for the addressee see R. E. Bennett, 'Donne's "Letters to Several Persons of Honour"', *PMLA* 56 (1941), 137.
- (63) Jonson viii, 52.
- (64) *Satires*, 90-1.
- (65) Gosse i, 217-18.
- (66) Jonson viii, 60-1.
- (67) *Elegies*, 83-4.
- (68) Gosse i, 314.
- (69) Bald, 275.
- (70) Bald, 295-7.
- (71) For Donne's letters to Mrs. Herbert see Walton's *Life of*

『ジョン・ダン入門』－背信と野心の詩人－

- Herbert, in Walton, *Works*, ed. Geoffrey Keynes (1929), 409-10, 457-9.
- (72) *Satires*, 88-90.
- (73) *Elegies*, 27-8.
- (74) *Elegies*, 252.
- (75) Jonson v, 167.
- (76) Lawrence Stone, *The Crisis of the Aristocracy* (1965), 561; Bald, 432.
- (77) *A Collection of Letters Made by Sir Tobie Mathews* (1660), 334.
- (78) For Drury and Donne's acquaintance with him see R. C. Bald, *Donne and the Drury's* (Cambridge, 1959).
- (79) *Satires*, 104.
- (80) *Satires*, 105-7.
- (81) *Epithalamions*, 6-10.
- (82) For Rochester and the Overbury scandal see D. H. Willson, *King James VI and I* (1956), 336-56; and Stone, op. cit., 667.
- (83) Bald, 272-3.
- (84) Gosse ii, 23, 41.
- (85) Gosse ii, 25.
- (86) *Epithalamions*, 16.
- (87) Willson, op. cit., 343.
- (88) Bald, 162.
- (89) *Divine Poems*, 32.
- (90) Bald, 327-8.
- (91) Bald, 413-14.
- (92) *Sermons* vi, 13.
- (83) Bald, 372.
- (84) Bald, 376.
- (85) Bald, 402.
- (86) See W. Milgate, 'The Early References to John Donne', *N & Q* 195 (1950), 229-31, 246-7, 290-2, 381-3.
- (76) See for example John T. Shawcross, 'Donne's "A Nocturnal Upon S. Lucies Day"', *Explicator* 23-4 (1964-6), 56; for the contrary view see Robert Ellrodt, 'Chronologie des Poèmes de Donne', *EA* (1960), 452-63.
- (88) Jonson i, 136.
- 一丁 参考書・記書
- 『憂鬱の時代』西山良雄著 (松柏社 一九九〇)。
- 『ダン抒情詩選』松浦嘉一訳 (東京 一九四七)。
- 『ダン詩集』星野徹訳編 (東京 一九六八)。
- 『ジョン・ダン抒情詩集』長谷安生訳 (成美堂 一九九一)。